

東洋学文献センター運営委員会委員 (昭和58年度)

東 研 教 授 (委員長)	池 田 武 夫 溫	千 枝
總 圖 書 館 長	裏 田 本 三 之 介	兼 英 治
法 教 授	松 戸 芳 郎 (新)	寬 道 雄
文 教 授	椎 名 重 明	一 成 佑
農 教 授	武 田 晴 人	偵 邦
經 教 授	丸 山 松 幸 (新)	孝 夫 (新)
教 養 助 教 授	近 藤 邦 康	屋 納 啓 良 (新)
社 研 教 授		

東洋学文献センター専門委員会委員 (昭和58年度)

教	授	池	田	温	(委	員	長)	教	授	戸	田	佑
教	授	池	田	一	成	(委	員	長代理)	助	加	納	良

東洋学文献センター教職員 (昭和58年度)

セ	長	教	授	大	野	盛	雄	業	中	里	富
ン	一	教	授	池	田	一	温	事	畦	浦	美
タ	任	教	授	田	仲	成	成	務	神	田	矢
ー	任	教	授	戸	田	禎	佑	官	渋	谷	子
主	任	教	授	山	之内	正	彦	官	治	義	枝
任		助	手					官			

[illegible]

この数年、編集が難行し、年度末ぎりぎりの刊行を繰り返してきたが、今回は幸い原稿に恵まれ、秋に編集することができた。

本センターは、本号巻頭の池田センター主任の一文にも見るごとく、この数年来一つの過渡期を迎え、特に従来、漢籍調査など国内に向けられていた活動を国外にも向けていくことが課題となっている。

本号では、これに関連して、先ずこの一年間、研究員として本研究所に滞在された香港中文大学の譚汝謙博士に「日中間の翻訳問題」と題して、一文を草していただいた。「日中間の翻訳の市民権低落」という指摘は、統計的論証というよりは、譚氏自身の直感に基づくものであるが、海外の専門家の意見として参考になる点があると思われる。

続いて、本センサーが過去約10年間にわたり、叢刊の一つとして分冊刊行してきた『仁井田陸博士輯・北京工商ギルド資料集』（第1—6冊）について、仁井田博士の共同調査者であられた今堀誠二博士から書評をいただいた。40年前の調査当時の思出を背景に、資料蒐集の状況、資料価値、編纂の特色等々、懇切を極めた紹介がなされており、資料の利用者を益することと信ずる。御多忙中、執筆の勞なとられた今堀博士に深く感謝申し上げる。（I.T.）

「東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センタ一報」センタ一通信 No.24 1983 年10月31日
発行責任者 岡部藤男 東京都文京区本郷7丁目3番1号 電話 代表(812)2111(内線)5839
直通(815)8394

信通一七

No. 25 - 1985. 7

東洋学文献センター主任に就任して

關寬治

コンピュータの発達の結果、文献情報の蓄積と加工と検索と利用とに革命的な変化をもたらすような時代に入ろうとしている。コンピュータの発達には、コンピュータの性能の向上と同時にコストの低下の側面がある。性能の向上について言えば単に計算速度の増大のみならず、漢字や図形のように今までも必ずしもコンピュータ向きでないと考えられていたようなものが、むしろコンピュータのもっとも得意とする領域であることがはつきりしたこともある。

また、コストの低下について言えば60年代の終りに性能の100分の1とか1000分の1とかで売られるようなパソコンが当時の値段の100分の1とか1000分の1とかで売られるような時代になって来ている。当時の大型コンピュータ以上の性能をもったパソコンさえも出現しはじめたのである。

こういふ状況のもとで米国のアジア研究者のみならず、中国や朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）の研究者でさえ、コンピュータによる文献情報検索の方向を模索しはじめている。日本語ワープロとパソコンとの接続はまさに漢字ワープロの利用であるが故にコンピュータをいっそう促進するという奇妙なパラドックスを生みはじめたようである。米国人の日本語学習の増大とワープロやパソコンの利用度とはあきらかに正の相関関係を示している。

最近、朝鮮民主主義人民共和国の人民大学習堂（中央図書館）を見て書物の検索と利用とがコンピュータ化されているのを見て驚いた。そこで使われているコンピュータの性能は、我々のパソコンの性能よりもはるかに低いにも拘らず、応用の方は一歩進んでしまっているわけである。

今、学術情報システムの汎用目的での建設が東京大学内でも真剣に考えられている。しかし東洋学関係ではなおそのネットワークにはいることには躊躇を感じたり、おそれたりする向きが強い。

しかしワープロやコンピュータにのり易くなった東洋学関係の文献情報検索のためにこそ、本格的なコンピュータ化を真剣に考えて見るべき時に来ているのではないだろうか。

あとからコンピュータ・ネットワークにはいるには、それ相応のあたらしいアイデアも必要である。それらのことについて本格的に議論するシンポジウムの開催が、そろそろ計画されてよいのではないかと考えるが如何なものであらうか。

(東洋学文献センター主任)

《大越史記全書》の寄贈を受けて

山内正博

昨年の10月、陳荆和氏の編校になる《大越史記全書》(上)が、また本年の6月、同書の(中)が、それを公刊した東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センターから宮崎大学教育学部歴史学第二(東洋史)研究室に寄贈された。かつて宋代のベトナムに関して上記研究所で同所蔵の《大越史記全書》を閲覧させて頂いたことがあり、その内容はいうに及ばず、なかでも閲読の跡を示す見事な朱点に感心し、機会があればその写真版でも思っていた矢先だったので、地方大学で東洋学の一部の講座をあずかるものとしては、文字通り願ってもない喜びであった。

概して地方にいてまがりなりにも研究といわれる活動が続ける場合、その活動はそれぞれの対象によって、a) 地方にいないければできない研究、b) 地方にいてもできない研究、c) 地方にいてはできない研究、のおよそ三者に分類されるように思われるが、筆者が関係する東洋学——世界史は、包括的にいえばそのうちのc) 項、つまり地方にいてはできない研究の部類に該当する。(但し京都を中心とする関西地方は、東洋学に関する限り、地方の区分には入らない。) まず第一に資料、そうして研究に関する各種の文献、さらに何よりもそれぞれ専門分野についての研究仲間の不在、といった条件が不可避免的に存在するからである。

もちろん対象を中国だけに限定すれば、各位の献身的な努力によって、近年とみにその悪条件は克服されてきた。身近な研究仲間の不在はどうにもならないとしても、他の二条件すなわち資料や研究文献は、本人の意欲次

第で大半はどうやら知見できるだけの体制にあるとしても過言ではない。しかしこと中国以外の地域となると、アジアの他の地域は論外として、中国からみてそれに最も近い朝鮮やベトナムでさえ、まず絶望的である。

それでも先年の学習院大学東洋文化研究所の影印になる《李朝実録》全冊の購入に続いて、一昨年は慶応義塾大学言語文化研究所の《大南寔録》を購入することができ、《明実録》、《清実録》と共にどうやら東アジアの歴史についての基本的文献の一部が揃えられることになったが、それらを通読して、改めて同じ漢字による表記とはいえ、その間にはずいぶんの相違があることに気がついた。例えば数字の記載法一つをとっても中国のそれ、朝鮮のそれ、ベトナムのそれ、そうして日本のそれ、には互いにかんがりの相違があり、それはそれなりに別途に分析する必要があるが、とかく漢文といえれば一様に時代遅れの封建道徳を鼓吹するものと見られがちな当世にあって、地域、主権により、さらにいえばそれぞれの民族の風土に規制された発想法により、表記にこれほどの相違があるとすれば、それは今後の研究に無視できないことであろう。

他の言葉でいえば、同じ漢字という文字表現の手段によりながら、内容的には、もちろん事柄の選択も含めて、ベトナムであればベトナムなりの明確な独自性、つまり脱中国化、が少なくとも《大南寔録》には主張されていると見ることも可能である、というわけであるが、それでは一体この文字表現による脱中国化が968年創立の丁朝以来、長く変転を繰り返したベトナムの歴史の中でいかに具体的な

な経緯をたどったのか? それはその期間を通じて弱まったのか? 強まったのか? 或いはそのいずれでもないのか? ここで始めてこの《大南寔録》の前史ともいえる《大越史記全書》の立場が浮かび上がってくる。

ところで地方にいてベトナム史を研究する場合の絶対的な必要条件の一つは、周知のようにかつてその宗主国であったフランス側の記録であるが、これについても最近ふとした偶然で1912-1915年にパリで公開されたアンリ・コルディエの《インドシナ書誌》の覆刻版を書架に備えることができた。もちろんこれはそれまで欧米で刊行された東南アジア(半島部)に関する文字通り《書誌》であって、記録そのものではないが、その扱い方、とくに分類法、にはいまでもなく当時ヨーロッパで盛行した学問体系が色濃く反映されているものと判断される。それで早速通読し、とありえずパラダイム化してみたところ、なるほどそれは、ビルマ、アッサム、シヤム、ラオス、マレー半島、仏領インドシナ、カンボジア、チャンプバの各地域について、総記、地理、(比較)民族学・人類学、気候・気象学、自然史、人口、政府、裁判、歴史、宗教、科学と技術、言語、文学、風俗・慣習、紀行、商業・航海、対外関係、各種、の項によって分類されているが、歴史の項は考古学と古銭学、銘文学が主流を占め、年代記、なかでも漢文によるそれ、はベトナム(仏領インドシナ)の部分にきわめて不十分に採録されているだけである。この《書誌》はその後も続刊され、また第二次世界大戦以後はヨーロッパ人のアジアに対する見方もずいぶん変ってきたとはいえ、少なくとも今世紀の初頭まではその眼は“特別な異国趣味”が“常に未成熟な友人を見出すそれ”が過半を占めていたようであって、このことが《書誌》にも投影され、まるで“近代化したわれわれ(ヨーロッパ)には歴史があるが、近代以前のかれら

(アジア)には歴史はない”かのような扱い方になったのかも知れない。漢字をあたかもエジプトのヒエログリフのように感じていた当時のヨーロッパ人が、漢字で表現される内容の思想性、歴史性、近代性に気付かなかったのも、当然といえば当然のことであるが、このような状況を考えあわせてみると、今回のこの《大越史記全書》の刊行は、さきの《大南寔録》のそれと共に、それこそ画期的な企画であるとしないうけにはいかない。

宮崎大学の教育学部は、教育学部としての責任と同時に他学部(農、工)の学生一般の教育等にもあわせて責任をもっており、従って実質的には教養・教育学部とするのが正確である。といっても教育条件は必ずしも良好ではなく、教育学部は1学年定員280名に対して教官定員99名、一般教育等に至っては1学年定員755名に対して教官定員わずか17名という現状であって、まともを考えればこれで十分な一般教育等が消化できるわけではない。それでもどうやら大学として、それほど大きなほころびを出さずにすすんでいるのは教育学部の教官の有形、無形の支援があるからであらうが、しかし社会全体の知的関心が高まるにつれて学生の意識もますます多様化することから、研究はともかくとして教育という面だけに限ってみても、教官各人あたりの守備範囲は際限なく広域化されないわけにはいかなくなる、という結果になる。

地方大学でのこのような立場からいえば、中央の各種研究機関、中央の各出版社から刊行される研究成果が重要であることは自明の要件であるが、その成果を新しい学問の方向として学生に伝える場合、ただ一つの歴史現象の説明という点だけをとりあげても、その成果をそのまま伝えるのと、成果を生み出した根拠に一応眼を通した上で自分の言葉で伝えるのとでは、説得力に天と地の開きがある。とすれば、明らかにその根拠の重要な一部を

構成する《大越史記全書》の寄贈を頂いたことは、研究面においてはばかりでなく、今後の宮崎大学での教育にもはかりしれない力として役立つものと、と確信されることになる。

難をいえば、原典をそのまま影印した《大南建録》とは異なり、この《大越史記全書》は手に入る各種の版本をすべて校勘し、改めて活字で句読点を施して組み替えられていることから、いわゆる原典の面影が消え、また間に活字、読み方に若干の問題がないわけではない、ということであるが、それもこの困難な事業が敢行されたことについての意義を

東南アジアの植民地期雑誌文献と 所収記事目録作成作業について

加 納 啓 良

このたび、筆者と大木昌名古屋商科大学助教授の編集による『植民地雑誌 (Koloniaal Tijdschrift) 所収論文目録』がセンター叢刊第43輯として刊行された。Koloniaal Tijdschrift とは、オランダ植民地時代のインドネシア、すなわち当時のオランダ領東印度の植民地政府内務省官吏の連盟組織 (Vereeniging van Ambtenaren bij het Binnenlandsch Bestuur in Nederlandsch Indië) が、1912年から1941年までの30年間にわたって刊行したオランダ語定期機関誌の名称である。Koloniaal Tijdschrift は、ドイツ語で言えば Koloniale Zeitschrift であるが、他にうまい言葉も見当たらないので、「植民地雑誌」という平凡な訳語をあてた。

実は、この目録は、今から10年以上も前に編者たちがまだはんのかけだしの研究者であった時分に、共同で行った作業の成果である。当時手探りでインドネシアの社会経済史の研究を始めていた私達にとって、全30巻のこの雑誌史料は、植民地期のインドネシア、とく

決して打ち消すことにはならないし、細部の検討にはもちろん逐一原典を参照する必要はあるにせよ、手軽な通観によって流れの概要を把握することができ点では全く抜群の好資料といえよう。

このような中央の研究機関のたゆみない努力が、やがては地方の c) 項の条件の下で苦闘している若い研究者たちを、a) 項とまではいなくとも、せめて b) 項の条件にまで引き上げるよすがになれば、と思う。(上) 巻、(中) 巻に続き、(下) 巻の完刊がまたれる次第である。(宮崎大学教育学部教授)

主題別、著者別、対象地域別に並べかえていくだけのことであるから、そんなに大変な仕事でもなかろうと私は多算をくくっていた。おまけに、第1巻から第20巻までについては、『植民地雑誌』の編集部自身が作成した主題別分類が第30巻に掲載されていることが分かり、その分類形式をほぼそのまま踏襲して残り10巻分の分類を行えば、事は足りるという見通しも立った。

しかし、実際にとりかかってみると、作業は最初に楽観したよりもだいぶ難航した。タイトルを見ただけでは内容の見当がつかなかったり、上記の分類枠組みにはうまくはまりそうにない記事や論文が予想外に多く続出したためである。このため主題別分類の項目を補充することが途中で必要になり、それに伴う見直し作業にかなりの時間と労力を割かねばならなくなった。また、中身の見当のつかないものについては、いちいち原文をあたってみなければならず、これはこれで相当に時間を要する仕事であることも痛感させられた。

数か月の悪戦苦闘のあげくようやくカードの並べかえ作業が終わったところ、当時の私の勤務先であったアジア経済研究所の上司から、せっかくの仕事の成果ゆえタイプ印刷にしておいてはどうか、そのための予算は面倒をみようという励ましの言葉を頂いた。大変ありがたいことであり、早速原稿の作成にとりかかったのであるが、これまた予想外に時間を食う作業となった。ワープロのような便利な道具の利用でできなかった時分のことである。やっとできあがった原稿を印刷屋にまわし、出てきたゲラを見てまたげんやせられた。誤植だらけである。よく考えてみれば、英語ならまだしも、今まで見たこともないに違いないオランダ語の、それも下手な手書きの原稿を間違いないタイプしてくれ、という方が無理な話である。そのうえ、ご多分に漏れず、原稿自体の間違いも校正の途中でぞろぞろ発見される始末。ところが困ったことに、タイ

プ印刷というのは、あまり大規模な訂正は技術的に困難である。仕方がないので、必要最小限の訂正にとどめ、別刷りで正誤表を作って、お茶を濁すことにせざるをえなかった。こういう次第で、印刷に付された成果 (アジア経済研究所内資料・調査研究部 No.47-8, 1972年) は、暫定稿ということにせざるをえず、将来の改訂の余地をのこしたまま、作業は終了することになった。

最初に述べたように、この目録はもともと私達自身のためのビブリアグラフィのつもりで作られたのであるが、いざ印刷されると、その出来上りの悪さにもかわからず、予想外に多方面から需要があり、なかには人手を経て外国にまでわたり、欧米系の研究者にまで結構重宝がられるという思いがけない事態まで生ずるに至った。そうなると、まず「製造元」としては、出来上りの悪さが気になるのであった。はじめにこの目録を若干部数印刷に回した際、外部からの需要はほとんどあるまいから、大半が在庫のまま積み残されるだろうと私は減っていたが、月日がたつにつれて在庫は減っていく、数年前にうちに払底してしまった。文献的な仕事に対する需要というものは、意外に息の長いものだ、思い知らされた次第である。折しも現在の私の勤務先である東大東洋文化研究所の東洋文学センターでは、今後漢籍以外のアジア諸国の文献をも資料活動の対象としていくという新しい方針が打ち出されるに至ったので、この目録に手を入れ直して再版したい旨を申し出たところ、快諾を頂き、またアジア経済研究所からも御了承頂くことができた。再版に際しては、旧稿における誤記・誤植を大幅に改め、「まえがき」、「凡例」、「解題」などを書き改めた。私としては、長年気掛かりに思っていた課題のひとつを、ひとまず解決しえたわけので、関係諸方面に厚く御礼申し上げたい。

こういうわけで、私個人にとっては、この

仕事は大部分以前の作業の仕上げということになるのだが、東洋学文献センターの側から見ると、これは今後続くであろう非漢籍文献のドキュメンテーション活動のスタートの位置付けを与えられることになろう。実際私個人としても、これが呼び水となって、将来アジア全域をカバーすることにつながる作業が続出すれば良いかと願っている。このことに関連して最近私が気にしていることとひとつに、東洋文化研究所も含めてアジア研究に携わる諸研究機関におけるマイクログリッシュ資料の所蔵の著しい増加がある。その多くが、自身についての目録作成のなされぬままに書棚につぎつぎ陳列されているのが、実情ではないかと推察する。私自身の専攻地域である東南アジアについてみても、マイクログリッシュ化された植民地期文献の量は、ここ数年の間に急速に増加しているが、その中から特定の情報を取り出すために必要なレファレンスの作業は著しく立ち遅れているように思われる。図書の公共利用という見地からみても、このことは時がたつにつれ重大な問題になってくると感じるの

は、私だけであらうか。この種のレファレンス作業は、語学の知識ばかりでなく、それぞれの国、地域に関する特殊知識を必要とすることが多い。いわゆる「地域研究ライブラリアン」の数が絶対的に不足しているという我が国の現状を踏まえるならば、研究者側からの積極的取り組みがなされぬ状況は、一歩も好転しないと思われる。幸い近年のいわゆるメカトロニクスの発達もたらしたワープロやパソコンの普及により、この種の作業の物理的負担は以前に比べてだいぶ軽減できようになっている。そうした作業の成果を、例えばセンター叢刊の刊行など東洋学文献センターのドキュメンテーション活動と結びつけることができぬものかと、私は身は思案し、少しずつその準備を進めている。しかし一個人がいくら力んでみても、やることにかぎりの研究者の方々に、同種くはできるだけの多くの研究者の方々に、同種の問題に関心をもってもらっていただき、それぞれのドキュメンテーション作業の成果を持ち寄っていただければ、と思うのである。

(東京大学東洋文化研究所助教授)

センター叢刊の訂正

『植民地雑誌』(Koloniaal Tijdschrift) 所収論文目録(第43輯)

共編者の加納啓良先生の御指摘により、次の様な誤字・脱落のあることが判明いたしましたのでお詫びして訂正いたします。

頁	行	誤	正
7	9-10	「監督官……等,」	「監督官 (controleur), 監督官見習い (aspirant-controleur) 等,」
94	2	Landrete……	Landrente……

加納先生の記事にありました通り、センター叢刊も従来の中国・朝鮮を範囲としていたドキュメンテーション活動を、アジア諸地域に拡大し、その一環として植民地雑誌所収論文目録を刊行しました。アジア諸地域関係の目録・解題・索引・資料集等で発表の機会がなく埋没しているものがありましてお知らせ下さい。

清末・民国年間刊行の新聞・雑誌プリント類を
購入して閲覧に供しています (’85. 3. 31 現在)

- 解放日報 第1～第55号：民国25年12月13日～26年2月20日
学原 第1～2巻：民国36年5月～38年1月
覚悟 第1期：1920年1月
救国時報 第1～第52期：1935年12月9日～1938年2月10日
月月小説 第1～第2年：光緒32年9月～34年12月
建設 第1～第3巻：民国8年8月～9年8月
繡像小説 第1～第72期：光緒29年5月～32年3月
小説林 第1～第12期：光緒33年1月～34年9月
少年中国 第1～第4巻：民国8年7月～13年5月
新時代 第1巻第1～第4号：民国12年4月～7月
新社会 第1～第19号：民国8年11月～9年5月
新小説 第1～第2年：光緒28年10月～31年12月
農鐘報 第1～第731号：民国5年8月～7年9月
新新小説 第1～第10期：光緒30年8月～33年4月
申報 第116冊～第205冊：民国元年1月～13年8月
晨報 第1～第3306号：民国7年12月～17年6月
晨報副刊 第1～15：民国10年10月～17年5月
人民週刊 第1～第50期：1926年2月～1927年4月
生活 第1～第8巻：民国14年10月～22年12月
生活教育 第1～第3巻：民国23年2月～25年8月
生活日報 第1～第3冊：1936年6月～1936年12月
星期評論 第1～第53号：民国8年6月～9年6月
浙江潮 第1～第10期：光緒29年1月～10月
戰士 第2～第42期：民国14年12月～16年4月
大公報 (長沙版) 第1～第6781号：1902年6月～1921年9月
大公報 (天津版) 第1～第30号：民国30年5月～12月
大衆生活 (香港版) 第1～第2巻：民国23年9月～24年9月
太白 第1～第2巻：民国25年9月～26年8月
中流 第1～第24期：1925年6月4日～6月27日
熱血日報 第1～第4期：民国27年10月～28年2月
文芸突擊 第1巻第1～第2期：民国28年5月～6月
文芸突擊 第1～第17号：1920年1月～5月
北京大学学生週刊 第1～第2885号：民国6年11月16日～21年9月10日
北京大学日刊 第1～第3分冊：民国16年1月～9月
民国日報 (漢口版) 第1～第6139号：民国5年1月22日～36年1月31日
魯迅風 第1～第19期：民国28年1月～9月

東洋学文献センター運営委員会 (昭和60年度)

東洋文化研究所教授 (委員長)	関 寛 治	東洋文化研究所	教授	中 根 千 枝
附属図書館長	山 崎 弘 郎	教 授	教 授	池 田 温
法学部教授	松 本 三 之 介	教 授	教 授	丸 田 雄
文学部教授	溝 口 雄 三	教 授	教 授	仲 田 成
農学部教授	椎 名 重 明	教 授	教 授	戸 田 佑
経済学部助教授	武 田 晴 人	教 授	教 授	杉 邦 孝
教養学部教授	丸 山 松 幸	助教授	助教授	屋 口 夫
社会科学研究所教授	近 藤 邦 康	助教授	助教授	猪 加 孝
		助教授	助教授	演 下 良
		助教授	助教授	演 下 志

東洋学文献センター専門委員会委員

教授	関 寛 治 (委員長)	助教授	加 納 啓 良
助教授	猪 口 孝 (委員長代理)	助教授	演 下 武 志
助教授	峰 屋 邦 夫		

東洋学文献センター教職員

センター長	教授 (併任)	尾上 兼英	業務掛長	中里 富三男
センター主任	教授 (併任)	関寛治	事務官	畦浦 美矢子
	教授 (併任)	関寛治	事務官	神田 百合枝
	助教授 (兼務)	猪口 孝	事務官	淡谷 義治
助手		山之内 正彦		

東洋学文献センター叢刊既刊一覧

* 第1輯	東洋文化研究所 東洋学文献センター 新収図書目録 (昭和41年度)	1968
* 第2輯	清代地方劇資料集 (一)	1968
* 第3輯	清代地方劇資料集 (二)	1968
* 第4輯	周樹簫著 周樹簫文庫 目録	1969
* 第5輯	郁達夫資料	1969
* 第6輯	東洋文化研究所 東洋学文献センター 新収図書目録 (昭和42-43年度)	1970
* 第7輯	朝鮮研究文献目録 単行書篇 (上)	1970
* 第8輯	朝鮮研究文献目録 単行書篇 (中)	1970
* 第9輯	朝鮮研究文献目録 単行書篇 (下)	1970
* 第10輯	李大釗文献目録	1970
* 第11輯	明刊元雜劇西廂記目録	1970
* 第12輯	朝鮮研究文献目録 単行書篇・編著者名索引	1970

* 第13輯	魯迅全集注釈索引	1971
* 第14輯	1930年代中国文芸雑誌 (一)	1971
* 第15輯	朝鮮研究文献目録 論文・記事篇 (I)	1972
* 第16輯	朝鮮研究文献目録 論文・記事篇 (II)	1972
* 第17輯	朝鮮研究文献目録 論文・記事篇 (III)	1972
* 第18輯	郁達夫資料補篇 (上)	1973
* 第19輯	切韻殘卷諸本補正	1973
* 第20輯	目録学	1973
第21輯	花間集索引	1974
第22輯	郁達夫資料補篇 (下)	1974
* 第23輯	仁井田 博士 北京工商ギルド資料集 (一)	1975
第24輯	江西蘇区文学運動資料集	1976
* 第25輯	仁井田 博士 北京工商ギルド資料集 (二)	1976
第26輯	民国以来人名字別名索引	1977
第27輯	自一九三七年至一九三七七年 日本現存 短期中国雑誌記事総目 (一)	1978
第28輯	仁井田 博士 北京工商ギルド資料集 (三)	1978
第29輯	中国左翼文芸理論における翻訳・引用文献目録	1978
第30輯	仁井田 博士 北京工商ギルド資料集 (四)	1979
第31輯	儀礼疏及正 (上)	1979
第32輯	儀礼疏及正 (下)	1979
第33輯	仁井田 博士 北京工商ギルド資料集 (五)	1980
第34輯	小説月報 (1920—1931) 総目録	1980
第35輯	定期刊物行 中国関係論説・記事索引	1981
第36輯	魯迅文語彙索引	1981
第37輯	自一九三七年至一九三七七年 日本現存 短期中国雑誌記事総目 (二)	1981
第38輯	自一九三七年至一九三七七年 日本現存 短期中国雑誌記事総目 (三)	1982
第39輯	仁井田 博士 北京工商ギルド資料集 (六)	1983
第40輯	東洋文化研究所蔵 中国土地文書目録・解説 (上)	1983
第41輯	自一九三七年至一九三七七年 日本現存 短期中国雑誌記事総目 (四)	1983
第42輯	校合本 大越史記全書 (上)	1984
第43輯	「植民地雑誌」(Koloniaal Tijdschrift) 所収論文目録	1984
第44輯	校合本 大越史記全書 (中)	1985
第45輯	江西蘇区紅色戲劇資料集	1985
別輯 1	東京大学東洋文化研究所蔵分類目録 (書名・人名索引) 京都大学文学部蔵分類目録 (書名・人名索引)	合併 四角号碼検字表 1975
別輯 2	海外所在中国絵画目録 (アメリカ・カナダ編)	1977
別輯 3	海外所在中国絵画目録 (東南アジア・ヨーロッパ編)	1981
別輯 4	日本所在中国絵画目録 (寺院編)	1982
別輯 5	LABRANG 李安宅の調査報告	1982
別輯 6	日本所在中国絵画目録 (博物館編)	1982

- 別冊7 日本所在中国絵画目録(個人蒐集編) 1983
別冊8 中国経済関係雑誌記事総目録(一) 1983
別冊9 孟郊詩索引(上) 1984
別冊10 孟郊詩索引(下) 1984
別冊11 中国経済関係雑誌記事総目録(二) 1985
別冊12 中国経済関係雑誌記事総目録(三) 1985
*はなくなりました。

近 刊 案 内

- 第46輯 宋之間詩索引
第47輯 内務行政雑誌 (Tijdschrift voor het Binnenlandsch Bestuur) 所収論文・記事目録
第48輯 校合本 大越史記全書(下)

東洋学文献センターの利用案内

- (1) 所 在
所在地 東京都文京区本郷7丁目3番1号
電 話 03-812-2111 (内線) 5839
(2) 利用手続
教職員の方は、身分証明書を提示して下さい。

学生の方は、在籍する大学の図書館長等の依頼状を持参の上、学生証を提示して下さい。
上記に該当しない方は、文献センター事務室に御相談下さい。
継続して閲覧を希望される時は閲覧表を発行します。当年度内有効です。
利用される際は、図書請求票に必要事項を記入し請求の上、所定の場所で御利用下さい。

- (3) 閱 覧
平 日 午前9時30分から午後4時30分まで。
土曜日 午前9時30分から12時まで

日曜日、祝日、年末年始は閉室します。その他業務上の都合により閉室することがあります。
参考調査：所蔵文献資料の検索、利用方法及び関連する所在調査を可能な範囲内で行います。

- (4) 文献複写
複写を希望される方は所定の手続をおとり下さい。
漢籍等電子複写機にかけられないものは写真複写になります。その場合別途手続をおとり下さい。
郵便でのお申し込みも受付けます。

「東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター」 No.25 1985年 7月25日
東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター発行 東京都文京区本郷7丁目3番1号
電話 03-812-2111 (内線) 5839



センター通信

No.26 1985.11

『申報』影印版の刊行について

濱 下 武 志

現在『申報』の影印縮刷版が上海書店から刊行されている。同書店の刊行計画は全体で以下の四期に分けられている。

- 第一期 1912年-1918年分 計 40冊
第二期 1919年-1937年分 計200冊
第三期 1938年-1949年分 計140冊
第四期 1872年-1911年分 計 40冊

この計画によると、『申報』が創刊された1872(同治11)年4月30日から、1949年5月27日(上海解放)の停刊に到るまでの78年間に亙る完全な蒐録版であり、総計420冊に及んでいる。但し、現在の刊行状況は、当面1872年から1936年までの範囲のようである。

『申報』影印版が刊行されるに至る経緯は1957年12月にまで遡る。『申報』影印組の説明によると、当時、この歴史的資料の保存を図るため、中央宣伝部の批准を経て、中央文化部が北京中華書局に影印出版の作業を委ねたことに始まる。1958年7月、北京中華書局はこれを中華書局上海編輯所へ移任したが、出版紙事情などの原因で出版計画は遅延し、1965年8月に至り、上海出版文献資料編輯所が、『申報』影印籌備小組を作り、刊行準備に着手した。同小組は縮刷見本などを作成したが、文化大革命により再び中断を余儀なくされた。80年代に入り、上海市委員会の宣伝部と上海市出版局とが、『申報』影印版の刊行作業の統行を決定し、それを上海書店の責任に委ねた。

以上のように、20年余に亙る曲折を経て刊行にたどり着いたのであるが、この『申報』全號の影印出版は、改めて言うまでもなく、中国近現代史研究の新たな画期をもたらすであろうと思われる。更に、この刊行が、四つの現代化という急速な経済改革が進む中で実現したことは、奇しくも、経済建設促進の中で、経済史研究の重要性が強調されている傾向と一致しており、

刊行に大きな重要性が置かれていることも想像に難くない。とりわけ新聞報道がその強みとする市況報道（物価変動・金銀価格変動・金利変動）は、それを数十年の長期変動において捉えてみると、そこには、季節変動を始めとする景気変動の幾つかのパターンが浮び上がってくる。そしてこの長期変動に対する洞察が、延いては中国の経済社会に固有な特質を把握する基本的な理解につながると考えられる。『申報』はこのような継続性を持つ記録を提供していることに最も大きな歴史的的重要性を見出すことができる。

『申報』が上海を基盤とし、上海経済界の利害を代弁して来たことから、すべての記事の中に、同時代の上海経済人の視野を透視することも可能である。即ち、『申報』が中国の近現代史と共にあり、清仏戦争・日清日露戦争・義和団事変・辛亥革命・五四運動・五三〇事件・直皖戦争・江浙戦争・四一二事件・抗日戦争などの歴史的イベントの報道において貴重であることは、言うまでもないことではあるが、それ以上に、この歴史的資料を読む側に要請されることは、同時代人が同時代人のそれぞれの利害関係の立場から表わした記事や記録から、同時代人の視野を明らかにし、それを媒介として歴史的イベントを再構成することにあると思われる。別言すれば、時代精神を或いはそこまで大がかりでは無いとしても、時代風潮を捉えようとする問題関心の下においてのみ、始めて新聞の歴史資料としての価値を現代的に顕現させることが可能になると思われる。

『申報』の経営をめぐる問題も興味深く、新聞の社会的地位を考えるに当って、一層検討が深められるべき課題の一つであろう。

『申報』は1872年イギリス人貿易商メジャー F. Majer によって創刊された。1889年メジャーが帰国し、1909年メジャー商会は同紙を青浦人の席子佩に譲った。しかし、発行部数も伸びず、経営不振に陥り、1912年9月に張謇や史量才などの手に渡り、紙面の改革がなされ、官民両面に互って記載の領域が拡大された。部数も増加し、1926年には14万1,000余部に至った。他方、激動期における新聞報道は、必然的に政治的色彩を帯び、『申報』が表明した抗日の論陣は、1934年11月14日上海において史量才が暗殺されるという事態を生じた。1937年上海が日本軍に占領されると、一時漢口と香港から発行されたが、翌年上海に戻り、アメリカ商人のロビンビア商会の名称で刊行された。しかし、1941年の太平洋戦争に伴い日本軍が租界に侵入し、『申報』は日本海軍報道部によって接収された。1945年8月以降は国民党政府が接収し、1949年5月27日の上海解放に伴い停刊となった。

このように、『申報』の経営自体が政治過程そのものであり、これらの変化の文脈において論調を分析する課題も存在すると思われる。

『申報』が上海経済界の機関紙とも言うべき位置にあったことから、宣伝、広告の占める比重は極めて大きい。宣伝、広告も、一方の極には商品そのものの宣伝を含み、他方の極には、官の告示に類するものに及んでいる。宣伝、広告は、それが一方的主張に近いことから、歴史的“真実”を知ろうとする見地からは往々にして退けられて来た研究領域であるが、主張者の側が、最大限に時代の消費動向を自己の宣伝内容に凝縮させようとしていることに鑑みれば、これも同時代の消費観を表わしている点において、すぐれた歴史的眞実を告げている。のみならず、これらの宣伝、広告の型や変遷を追跡することを通じて、同時代の経済観、更には中国的経済観の比較検討が可能になると思われる。

以上、『申報』の全貌を捉えることが可能となった現在、そこから導かれるべき幾つかの検討課題を記してみたのであるが、勿論これらに止まるものではない。紙面の構成一つ取ってみ

ても、評論・専電・公電・譯電・要聞・広告・瑣聞（城内・南市・閘北・英租界・美租界・法租界）・自由談・詩文などの多岐に亘っており、また、後幅（副刊）や第一帳・第二帳などの機軸も、それらの形態が、幾多の社会事象の反映として十分に検討される余地が残されていることに気付くのである。

ともあれ、『申報』の全貌に亘る影印刊行は、各號・各記事・各報導の意味する範囲をはるかに越えた、中国近現代の時代像を形作る歴史的資料を提供していると考えられるが、そればかりでもなさず、実は現代の『申報』読者の問題関心のあり方を改めて問おうとしていると言えるのではあるまいか。

（東京大学東洋文化研究所助教授）

本文献センターでは、申報を第116冊—第255冊（民国元年1月—18年2月）迄所蔵しています。（'85年10月現在）

『号炮集』 — まだある幻の戯曲集 —

中野淳子

このたび、秋吉久紀夫編『江西蘇区文学運動資料集』（'76、東洋学文献センター刊）の姉妹篇として『江西蘇区紅色戯曲資料集』を東洋学文献センターより、センター叢刊の一冊として刊行していただきました。この二つは、いずれも東洋文庫所蔵のマイクロ・フィルム「陳誠コレクション」を底本としていますが、これは、スタンフォード大学のフーヴァー研究所図書館所有のものです。

一方、台湾所有の「陳誠コレクション」については、石川忠雄先生が、1961年夏、香港、東南アジア旅行の際、台湾に立ち寄り調査された所謂「陳誠文庫」の目録を、早くも1962年に資料として慶応法学研究会の『法学研究』35巻7号で紹介されていた。江西蘇区時代の出版物は、この石川先生の1962年の紹介に始まり、秋吉先生の76年、中野淳子の85年になって、やっと江西蘇区時代の戯曲が、多

くの人々の手元で利用される形となりました。もっとも私の85年は、あまりにもおそすぎたもので、78年の夏休みには、幸い小型のマイクロ・リーダーを所有していたので、フィルムを借出し、焼付け版と対照し読していたが、80年から交流を持つようになった江西師範学院（現在の江西師範大学）中文系に、秋吉先生の『江西蘇区文学運動資料集』、「陳誠コレクション」マイクロ・フィルム中の戯曲部分の焼付け版の再複写及び私の読了稿とを、そっくり送っていたので、今日まで延引してしまっていました。

ところで、江西蘇区瑞金時代に活躍し、長征に出ず（出られず？）残留組となった趙品三は、主力の長征出發後の演劇活動は、翟秋白の指導のもとに、上演活動のほか、戯曲、歌舞劇、山歌小曲等の集団創作も行われ、「犠牲」「不要險」「非人生活」（鄭胎周作）

「李保蓮」(韓進作)「游撃」(趙品三作)の五篇を収めた戯曲集『号炮集』が騰写印刷出版されたこと述べています。この戯曲集は32開本(787×1,092ミリの32分の1——日本の印刷用紙規格とは異なる)で、表紙の題字は翟秋白の直筆で、およそ三百余部印刷され江西蘇区全区へ配布されたと『戯劇論叢』'82, 3輯で趙品三は述べています。この『号炮集』は蘇区で初めて出版された戯曲集といわれているが、『江西蘇区紅色戯劇資料集』に語彙注釈をつけて下さった汪木蘭先生は「蘇区文芸運動大事記」(『江西師院学報』'81, 2期)及び「江西蘇区文芸運動大事記」(『江西蘇区文学史』'84, 江西人民出版社刊)のいずれに於ても、長征前に出版と記しているもので、あるいは何か新資料にもとづいているのかもしれないが、この戯曲集には長征前に書かれた多数の戯曲を収載した『紅色戯劇』『江西蘇区紅色戯劇資料集』のものが、一つも含まれていないうえ、残留組の書いた作品が三篇、残留後に執筆したものが二篇含まれ、更に残留組がこの五篇をすべて、合同公演の

際に上演しているもので、やはり趙品三の記述通り、長征後、手薄になった演劇活動の中で、集団創作され出版されたものと考えられます。『劇本』'84, 1号で李伯釗が語るように、既存の戯曲を長征組は搬出したものの、のち湘江渡河の際、失くしたと述べています。残留組では、この時期すでに従来の戯曲はあるいは散逸していたのかもしれません。

1960年、江西人民出版社刊、27開本、168頁の『紅色戯劇』(江西師範学院中文系等編)及び'85年、東洋学文献センター刊の『江西蘇区紅色戯劇資料集』には、多幕劇、独幕劇、活報劇、相声双簧、蓮花閣「落」等が、それぞれ25篇ずつ収められているが、鄧家琪先生は『江西蘇区文学史』緒論中で、「我々が収集した50余の戯曲について見ると……」と述べているので、この2冊所収のほかに、いくつか資料が存在しているかのようです。が、しかし『号炮集』にはふれていないので、あるいはまだみつかっていない幻の戯曲集かもしれません。

(早稲田大学非常勤講師)

紙の電子スピン共鳴(ESR): 劣化度による年代測定

池 谷 元 伺

劣化は、紙のセルロース繊維の長さの問題のみでなく、水性インキや水のにじみ止めに使われる「サイズ剤」として、硫酸アルミニウムカリウム(カリ明ばん)などが用いられていることによる。カリ明ばんの分解により紙中に硫酸が生じたり、塩素による漂白は紙中に塩酸が生じる原因となる。これが「酸性紙」であり、セルロース繊維の切断が酸性下の酸加水分解で進行する。

紙の劣化には、酸化反応や光化学反応によ

紙の劣化: 酸化反応と酸性紙

貴重な書籍や公文書が、紙の劣化のために崩壊の危機にさらされているという。千年の歳月を経て、虫喰いにさらされて変色も少ない紙もあれば、数年にして黄色の著しい紙もある。一般書のうち最近の100年の間に作られた紙は、木材パルプ、特に碎木パルプを利用している機械作りの紙であり、綿や麻などのボロ原料の紙に比べて劣化が著しい。紙の

るものもある。ここでは、劣化に伴って生じるラジカル(不対電子を持つ分解の初期生成物)を、電子スピン共鳴(ESR)というマイクロ波分光法で検出し、劣化度から年代を求める「ESR年代測定」について紹介しよう。劣化によって紙が変色して可視光を吸収するように、マイクロ波の電波吸収が生じるのである。この吸収量から紙の相対的年代を求め、さらに試料温度を上げて劣化を進行させる「加齢実験」から、絶対年代を求めようとする新しい試みである。ESRは劣化の機構を調べる上でも、有力な手段となりそうである。

さらに、古文書類の保存方法について、素人なりに提案してみたい。

電子スピン共鳴(ESR)年代測定

電子の自転を電子スピンと呼ぶ、負の電荷を持つ電子が自転すると、小さな磁石と同じように周辺には磁場が生じる。物質を構成する分子では、多くの場合、電子はスピンの方向が逆の電子と対をなしている。このため、物質は磁氣的性質を示さない。ところが、物質に放射線や紫外線が照射されると、電離現象のため「不対電子」が生じる。不対電子はその磁氣的性質のためマイクロ波を吸収する。ESRと呼ぶ分光法で電子スピンの濃度を調べると、自然の放射線または光に曝された総線量または総光量(TD: total dose)が判る。年間の自然放射線量(または光量)を評価すると、その年代値を求めることができる。これが、「ESR年代測定」である。

自然放射線損傷を利用したESR年代測定は、化石骨や鍾乳石をはじめ、貝殻やサンゴの化石、石英粒子を用いて、考古学、人類学、海洋科学、地質学(地球科学)など広い分野で利用されはじめた。昭和60年9月には、山口県宇部市と秋吉台科学博物館で、第1回ESR年代測定国際シンポジウムが開かれ、内外より100名の参加者があった。地質学関

連の発表が主であったが、紙や皮などの有機物の年代測定の可能性に関する発表もあった。有機物の化学的分解や酸化反応によって生じるラジカルの場合、その生成率は温度に著しく依存する。したがって、試料の置かれた温度の正しい評価が必要となる。数度の温度評価の変化によって、年代値は2~3倍はすぐに変化してしまう。この為、「絶対年代」を得ることは、化学反応を利用した年代測定法では至難の業といえる。有機物のESR年代測定も、残念ながらこの範囲を越えることができない。問題は、それでも劣化度から年代値を評価することを必要とする考古学者、歴史学者、法医学者があるかどうか、さらに、どの程度にまで誤差を縮め得るかによっている。以下にポテトチップスと古籍の例を挙げて、有機物のESR年代測定法について紹介しよう。

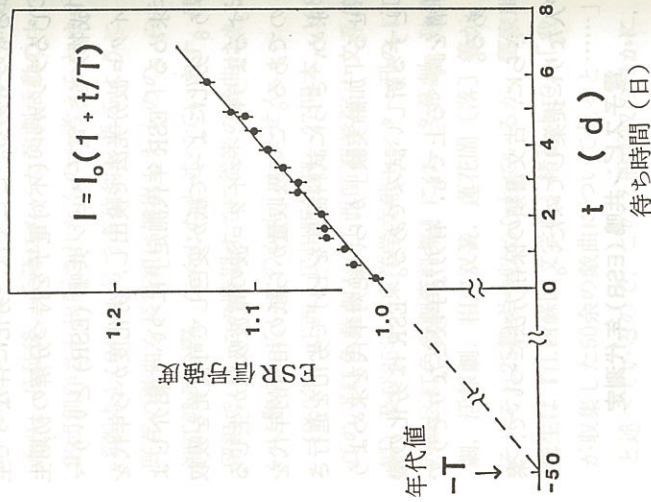
ポテトチップス

数年前に「ポテトチップスのESR年代」を発表した時、人々はデラゲラと笑い、論文の査読者は「ポテトチップスは考古遺物ではない。」と受理してくれなかった。年代測定の方法論を主体とした論文であり、年代値の若い(数拾日の)ポテトチップスで実証してみせたつもりであったのだが……。

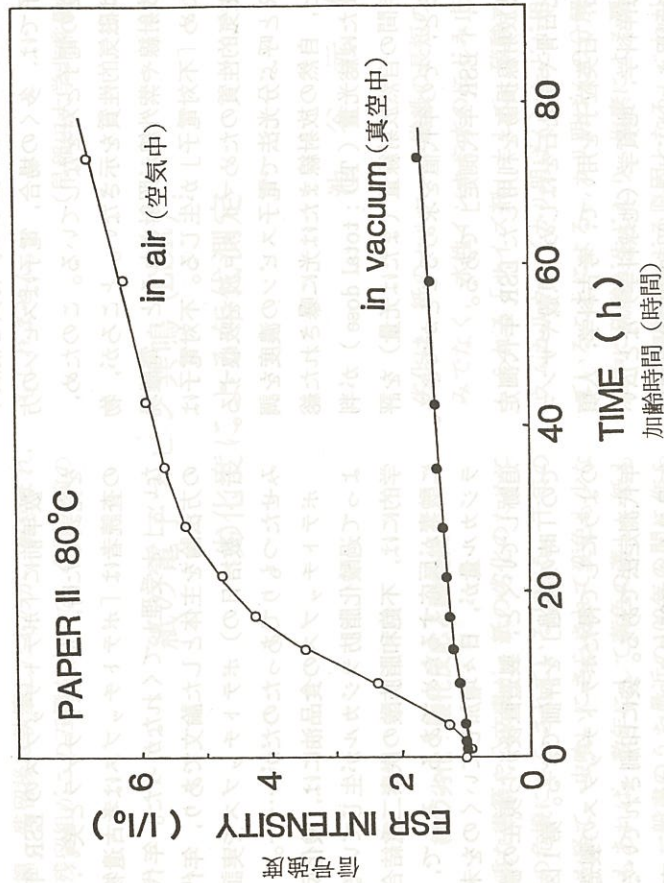
ポテトチップスの食品油には、酸化反応によって過酸化脂肪ラジカルが生じている。化学的には、不飽和脂肪酸の炭素二重結合部分に酸素が反応するためである。そこで、このラジカル量が、日々増加していくのを未来へ追跡していくと、製造直後から現在の濃度までの「時の経過」を評価できる。第1図はこのようにして得たポテトチップスの製造日の年代測定法である。袋に印刷されている製造年月日からの35日より、データの直線近似で50日、曲線近似で40日と、日数が古くである。これは、実験データが、夏から秋にかけてと温度が低下していったため、ラジカル

第1図

ポテトチップスの過酸化脂肪
ラジカルの信号強度の増大か
ら、製造日を評価する有機物
のESR年代測定。「待ち時間
方式」は加齢実験により大幅
に時間が短縮される。



第2図



紙の加齢実験によるラジカル生成。空气中と真空中でラジカル
生成量が異なるのは、酸化によるセルロースの分解反応のため。

生成量が抑えられたためである。その後、ラ
ジカル生成量の温度依存性などの化学反応速
度を実験的に調べ、温度変動が判ればより正
しい年代値を求め得るようになった。対象も
遺体の死亡時刻の判定など「法医学」へと拡
大している。

紙の酸化反応

第2図は、紙の温度を高温に保ち、分解初
期のラジカルのESR信号強度を調べたもの
である。化学反応を利用した年代測定では、
温度を上げることが、実験室内での時の経過
のスピードを上げるタイムマシンを用いるこ
とに相当する。興味深いことは、ラジカルの
生成量は空气中では著しく、真空中では少な
いことである。

年代測定においては、紙片 (3mm×30mm×
1~3mm厚) のESR信号強度を測定し、種
々の温度での加齢実験から外挿して、室温で
のラジカル生成率を評価する。現在のラジカ
ル量から、この生成率を用いて年代値を求め
る。この年代測定で最大の問題は、試料が過
去に経験した温度評価である。平均的な温度
を何度と見積るかで、年代値は簡単に2~3
倍は変わる。したがって、同一条件に置かれ
た試料でなければ、相対年代値すら怪しくな
る。このような頼りない年代測定法であるが、
真偽判定などにESRを必要とする東洋文化
研究者はおられるだろうか。

紙の酸化防止法

酸性紙の中和方法としては、真空容器で水
分を除去した後、アルカリ気中に保ったり、ア
ルカリ性物質を有機溶媒で溶かしたスプレー
を吹きつけ乾燥させる方法が米国で利用され
ている。碎木パルプから工業的に製造された
酸性紙でない「古籍」や「書画」の場合も、
酸化によるセルロースの劣化は避けられない。
よりよい保存方法は考えられないだろうか。
劣化の原因となるラジカルの生成は、酸素を

除くと大幅に抑えられるのである。またラジ
カル生成も化学反応の1つにすぎない。した
がって、次のような対策が考えられる。

1) 不活性ガス密封法：特殊書棚と書籍ラ ップ

ポテトチップスのフレッシュ・パックを考
えて頂きたい。古文書の類をポリエチレン容
器に入れて、空気をアルゴンまたは窒素と置
換するのである。食品のフレッシュ・ラップ
は、アイディア商品としてすでに市販されて
いる。書籍のフレッシュ・ラップを作り、読
書後は再び包み直すことにすればよい。但し、
塩ビなど有機フィルムからのガス放出が、本
に悪影響を与えないかどうかの検討や、外界
からの酸素の浸入を阻止するためのフィルム
厚が問題である。これらは食品保存の研究で、
ラップ用フィルムのメーカーが実験データを
充分に持っている。古籍のフレッシュ・ラッ
プ装置も、小型アルゴン (窒素) ボンベ付で、
3~5万円で市販が可能である。吸着酸素を
考えても、酸化度を1/5に抑えることは難
かしくない。

もう1つの方法は、書棚を密封式にし、内
圧を少し高めの窒素または不活性気で保つ。
本を取り出す時に空気が入ることになるが、
内圧を高めておけばやがて不活性ガスが置換
する。ガスに毒性はないが、人間の入る部屋
の部分は換気を心掛けたい。このような
特殊書棚の製造コストは、ほとんどかからな
いし、現在の書棚の改良程度で充分である。
上記のラップ法と併用すれば、酸化を1/20
以下に抑え得るであろう。この方法の利点は、
虫害を妨ぐことも同時にできることにある。
虫の類の活動にも酸素が充分必要であろうか
ら。このようなアイディアを実行することは、
それ程経費はかからない。

2) 低温保存法：冷蔵 (書) 庫

高温で加齢実験を行うのが「化学反応」で

あるから、書籍を冷暗所に置くべきなのは言うまでもない。東洋文化研究所の書庫が、冷えすぎの計算機室よりもさらに冷えていれば、古籍の酸化速度は1/2~1/5には抑えられるであろう。本堂に貴重な古文書は、冷蔵(書)庫に保管すれば、半永久的に酸化は抑えられる。但し、取り出し時には水滴の付着の問題があるので、フレッシユ・ラップに入れておき、室温になって取り出すことが望ましい。本の寿命は半永久的になるであろう。

むすび

オーストラリア連邦大学で松丸道雄東大東文研教授にお会いし、ESR年代測定用の試料の件で尾上兼英東大東文研所長に御紹介頂いたので、本文を書くことになった。文化財科

中国の民国時代中央及び地方政府資料

マイクロフィルムリスト(*印は欠号があるもの)

- 安徽省公報(月刊) 10~30 (1939年10月~1941年6月) 1リール
安徽省政府公報(日刊) 793~982 (1937年5月~11月), 262~718 (1943年8月~1948年7月)* 8リール
北平市政公報(周刊) 1~169 (1928年7月~1929年6月), 1~399 (1929年7月~1937年4月)* 25リール
北平市政公報(旬刊) 181~243 (1943年1月~1944年9月)* 3リール
財政年鑑 上海 商務印書館 1935年9月 2リール
察哈爾省政府公報(周刊) 1046~1072 (1937年1月~7月) 2リール
長沙市政(季刊) 1~33 (1933年11月~1937年7月) 2リール
長沙市政彙刊(1931年8月~1932年12月) 1リール
成都市(月刊) 1~4 (1945年3月~8月) 1リール
成都市政府公報(半月刊) 1~22 (1942年2月~12月), 1~15 (1943年1月~8月)
成都市市政公報(月刊) 2~48 (1928年5月~1932年9月)* 4リール
成都市政府月刊 1~9 (1941年1月~9月) 1リール
重慶市政府公報(月刊) 43~44 (1943年4月~5月), 1: 1~II: 6 (1944年1月~12月) 1リール
村治之理論與實際 村治月刊社編 北平 編者 1932年12月 1リール
地方行政會議紀録(民國10年) 1リール

学会の会員であるとはいえ、電子工学と原子力工学から学際領域の年代測定へと脱線し、保存科学は手がけたことのない素人の雑文である。ここに述べた提案の類は、誰が思いつくであらうと考えられる提案ではない。研究室の講師からは、「技術屋としては稚拙」とのコメントを受け、その通りであると取入る次第である。

書籍の価値は、そこに書かれた内容(情報)と博物的価値であらう。内容はマイクロフィルム化して保存すれば充分であり、博物的価値や文化財としての価値は、不活性ガラス書棚や冷蔵書庫で保つ以外は考えられない。

素晴らしい解決法を期待された編集子にお詫し、この苦役から解放されたいと思う。如蒙(山口大学工業短期大学教授)

- 地方行政與自治 溫晋城著 合作經濟合作社 1953年8月 1リール
地方自治法令彙編 廣東民政廳編 1930年10月 1リール 1934年11月 1リール
地方自治講義 内務部編 上海 泰東圖書局 1925年 3リール
地方自治實施方案法規彙編 胡次威著 上海 大東書局 1947年11月 1リール
地方自治學與村治學之紀元 尹仲材著 上海 大中書局 1929年12月 1リール
地方自治之理論與實際 趙如珩著 上海 華通書局 1933年1月 1リール
地方自治資料 浙江省地方自治專修學校編 1944年12月 1リール
福建省政府公報(半月刊) 507~1812 (1935年7月~1946年11月)* 18リール
甘肅省政府公報(半月刊) 485, 487, 615~630 (1940年1月~1946年8月) 1リール
廣東省政府公報(旬刊) 1~367 (1929年7月~1937年5月), 1~58 (1945年10月~1947年12月)* 32リール
廣西省政府公報(日刊) 378~2321 (1939年2月~1949年1月)* 26リール
廣州市市政公報(周刊) 1~552 (1921年2月~1936年10月)* 30リール
貴陽市政(半月刊) III: 9, 12, IV: 1 (1943年2月~7月) 1リール
貴州省政府公報(旬刊) 1~110 (1929年11月~1931年2月), XII: 169 (1941年12月), I: 6, X: 1~8, XI: 1~12, XII: 1~3 (1942年3月~1947年8月)* 2リール
國民年鑑——民國三十年實用——千家駒等著 桂林 文化供應社 1941年 1リール
國民年鑑——1949年手冊——華商報資料室編 香港 華商報社 1949年4月 1リール
國民政府公報(隔日刊) 1~543 (1940年4月~1943年9月)* 12リール
漢口特別市市政府公報(半月刊) 7~8, 12 (1941年4月~6月)* 1リール
杭州市政公報(月刊) 1~18, 1 (1939年7月~1941年1月)* 1リール
杭州市政月刊 I: 1~V: 10 (1927年12月~1931年10月), I: 1~III: 4 (1933年1月~1935年10月), 復刊號(1947年6月~9月)* 7リール
河北省公報(周刊) 1~280 (1938年7月~1943年12月) 11リール
河北省政府公報(日刊) 519~3224 (1930年1月~1937年8月), I: 1~V: 7 (1946年6月~1948年9月)* 94リール
河南省政府公報(旬刊) 2296~2394 (1939年4月~1941年12月), 1~45 (1945年12月~1948年5月)* 2リール
湖北省政府公報(半月刊) 514, 517 (1944年12月) 1リール
湖南省政府公報(周刊) 8, 1~52 (1929年3月~1930年4月), 1211~1225 (1943年9月~11月), I: 2 (1945年10月), 1~27 (1946年5月~12月)* 10リール
吉林省政府公報(半月刊) 1~46 (1946年6月~1947年4月)* 1リール
濟南市政月刊 I: 1~IV: 3 (1929年9月~1931年8月)* 3リール
江蘇省政府公報(周刊) 1~342 (1927年9月~1930年1月), 52~310 (1939年5月~1945年2月), 13~36, 1~36, 1~22 (1946年5月~1948年8月)* 12リール
江西省政府公報(周刊) 1~35 (1929年1月~11月), 1130~1462 (1939年7月~1946年11月)* 10リール
考試院施政編年録(1928年8月~1941年12月), (1942年~1949年) 考試院 1945年, 1955年 4リール
遼北省政府公報(旬刊) 11~12 (1946年11月) 1リール

遼寧省政府公報 (日刊) 29~361 (1930年2月~12月), 1~256 (1931年1月~9月)* 25リ
旅大行政公署公報 28~34 (1949年9月~10月)
南京市政府公報 (月刊) 17~79 (1928年8月~1931年3月), 115~178 (1932年9月~1937年6月), I: 1~IV: 8 (1946年5月~1948年4月)* 12リ
南京市政公報 (半月刊) 25~156 (1939年6月~1944年11月)* 3リ
内政年鑑 上海 商務印書館 1936年4月初版 4リ
寧波市政月刊 I: 1~III: 8 (1927年9月~1930年11月)* 3リ
青島市政府市政公報 (月刊) 39~83 (1934年4月~1936年12月), IV: 1~VI: 9 (1947年1月~1948年3月)* 5リ
青島市政公報 (月刊) 4~31 (1939年10月~1942年1月)* 1リ
青海省政府公報 (月刊) 69~71 (1938年7月~9月) 1リ
全國內政會議報告書 南京 內政部 1931年, 第二次: 1932年12月, 第三次: 1942年12月 3リ
全國銀行年鑑 上海 中國銀行總管理處 1934年6月初版 1リ
銓叙年鑑 (民國十九年度) 南京 銓叙部 1932年10月, (民國二十至二十二年): 1934年7月 2リ
熱河省政府公報 33~34 (1947年5月~6月)
山東省政府公報 (周刊) 31~111 (1946年12月~1948年6月) 2リ
山西村政彙編 村政處 1928年1月 1リ
山西省公報 (半月刊) 25~102 (1940年1月~1943年3月)* 3リ
陝西省政府公報 (日刊) 878~903 (1930年1月), 38~1106 (1937年2月~1948年4月)* 11リ
汕頭市政 創刊號 (1950年5月) 1リ
汕頭市政府公報 (旬刊) 71~75 (1931年8月~12月), 3 (1940年4月), 12~13 (1942年4月~7月) 2リ
上海市政府公報 (3日刊) I: 1~X: 6 (1945年12月~1949年2月)* 9リ
上海市政府公報專刊 (月刊) 1~8 (1948年1月~8月) 1リ
上海市政公報 (月刊) 1~27 (1938年10月~1940年10月), 1~40 (1942年1月~1944年4月)* 3リ
瀋陽市政府公報 (周刊) II: 2~19 (1947年1月~8月) 1リ
四川省政府公報 (旬刊) 1~717 (1935年3月~1948年1月)* 19リ
綏遠省政府公報 (日刊) XL: 1~27 (1936年12月), 8~38 (1946年8月~1948年5月)* 1リ
臺灣省政府公報 (日刊) (1946年2月~1949年12月)* 14リ
天津市政府公報 (月刊) 6~98 (1929年1月~1937年3月)* 16リ
武漢特別市市政府公報 (半月刊) 7 (1939年11月)
西安市政府公報 (月刊) I: 1~7 (1947年10月~1948年4月) 1リ
西康省政府公報 (旬刊) 77~207 (1941年10月~1947年12月)* 2リ
廈門市政 1~3 (1950年2月~6月) 1リ

新疆省政府公報 (月刊) 17 (1932年8月), I: 1~2 (1947年10月~11月)* 1リ
雲南公報 (日刊) 186~1309, 39~364, 1 (1923年5月~1928年9月)* 29リ
雲南省政府公報 (周刊) XVI: 21~44 (1944年5月~10月)* 1リ
翟城村・米迪剛・尹仲材著 北京 中華書局 1925年8月初版 1リ
浙江省政府公報 (日刊) 493~3454, 1~74, 1 (1929年1月~1949年4月)* 78リ
浙江省政府公報 (半月刊) 1~40 (1938年6月~1940年2月)* 1リ
浙江省政府公報法規專號 (1937年11月~1939年3月) 1リ
政府公報 (周刊) 1~86 (1938年4月~1939年12月) 2リ
中國保甲制度 聞鈞天著 上海 商務印書館 1935年6月初版 1リ
中國國貨年鑑 上海 國貨事業出版社 1935年3月 1リ
中國金融年鑑 上海 中國金融年鑑社 1947年10月初版 1リ
中國經濟年鑑 上海 商務印書館 1934年5月初版 4リ
中國經濟年鑑彙編 上海 商務印書館 1935年9月初版 3リ
中國經濟年鑑第三編 上海 商務印書館 1936年10月初版 2リ
中國貿易年鑑 上海 中國貿易年鑑社 1949年 1リ
中國貿易年鑑附香港貿易年鑑 香港 工商徵信所 1949年1月初版 1リ
中華民國統計年鑑 南京 主計部統計局 1948年6月 1リ
中華民國政府公報分類彙編 (民國元年~3年) 雷澤編 上海 掃葉山房 1915年 7リ
(この資料は、本センターが「大型コレクション」として'79年度に受入れたものです。)

第20回全国文献センター長会議から

60年2月8日(金)に全国文献センター長会議が、東大東洋学文献センターで開催された。
設立から20年を経た各センターの活動状況が報告され、現在抱える問題について討議されたが、取り上げられた論点の中から幾つかを紹介する。
各文献センターの現状について、外国文献センター(東大)は、基本的な資料収集を行うことにより、利用者の必要とする情報を提供しているが、特に希望の多かった東南アジア諸国の法制調査資料の収集を実施している。同センターは新館が着工となり完成すれば利用面での便宜が大きくなる。
特別事業として、多国籍企業のデータベース化に取り組んでいる経営分析文献センター(神戸大)は来年度で第一段階の作業を終え、その後に入力データの年次のメンテナンス事業を行うこととし、現在実施しているフォーマットはアンケートの結果、内容の

拡充が望まれている。また、できるだけ各企業から直接入手したデータを入力し、企業情報維持拡充を図っている。

東洋学文献類目を刊行している京大東洋学文献センターは、58年度から電算機により編集しているが、より効率的な編集を目指しデータベース作成のためのシステム検討を行っている。漢字の電算機処理システムの開発は成果をあげたので、今後は多言語情報に関する研究を行うことにしている。

東大東洋文化研究所は、研究棟の面積増に伴う改修工事を58年度に実施し、東洋学文献センターも使用面積が増え、資料公開に利用効率が図られ機能が充実してきた。センター叢刊の刊行、漢籍所在調査、漢籍整理長期研修を業務として実施し、電算化についても調査委員会を設け、各大学等の実情を調査した。

現在各大学・研究機関で関心の高い学術情報システムについて、学術審議会からの提言を受け、各大学関係者の協力を得て論議されたところでは、学術情報センター自身で作るデータベースは書誌所在情報に関するもので、二次情報とかファクトデータベースは専門家の所属する機関で作成することになる。文献センターの希望・意見は何等かの形で反映させたいと文部省の説明があった。

自然科学では、書物の形になったものより、雑誌の中の論文が大事である。人文科学では単行書、雑誌の中の論文が必要であり京大東洋学文献センターでは両方を結合させようと

努力している。学情システムの方でも、書物と雑誌の論文を扱おうとしているが、双方をうまく結合させないと使おうのに不便である。その辺を十分配慮するよう発言があった。

図書館の目録検索は、全部電算機に入れるのが目標であるが、内容にまで立入ったデータバンクについては、特定の範囲内で学術情報システムを設計し、個別的な議題に応じてシンポジウムを行うべきだとの意見が東大東洋学文献センターから出された。

酸性紙に起因する書物の劣化が問題になっているが、政府刊行物収集の比重が大きい日本経済統計文献センターから出来るだけ中性紙を使用して欲しいと希望が出された。

経営分析文献センターから、その対策としてマイクログラフより光ディスクに注目し、まだ機器が開発されたばかりで実用の段階ではないものの、扱い易く後の処理が簡単であるという紹介があった。京大東洋学文献センターから、光ディスクも好ましいがコストが高いので、温湿度の面で書庫の改造を図る方が適切ではないかと意見が出された。書物の劣化は酸性紙だけの問題でなく、書物保管のあり方として考慮したい、光ディスク化の技術開発は研究が進んでいると文部省から見解が述べられた。

なお、酸性紙の問題について山口大学工業短期大学部池谷教授に本通信へ御寄稿いただいた。

「東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター通信」No.26 1985年11月25日
東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター発行 東京都文京区本郷7丁目3番1号

電話 03-812-2111 (内線) 5839

61. 6. 25

東京大学東洋文化研究所・東洋学文献センター報

The Documentation Center for Asian Studies
Institute of Oriental Culture
University of Tokyo

センター通信

No.27 1986.6

越南史料との出会い、

陳 荆 和

私は慶応義塾大学の予科時代、ドイツ文学に凝り、宿舍としていた神田美土代町のYMCAで学友たちと独逸研究会を作って会合を重ねたり、ヘルマン・ヘッセの詩を訳したりしていった文学青年のつもりでいたが、三田の学部に進学するに及び、コロリと豹変して全く別世界の史学科東洋史専攻に籍をおいた。その動機は今から顧みて判然としないが、私自身の家系（父は医者であったが、漳州移民の末であり、母は泉州系貿易業者の裔）に就いて考える所があり、当時の南進の風潮にも影響を受けて、漳泉系華僑が活躍した東南アジアの歴史・文化の研究を思立ったものの如くである。

かくして、松本信広先生を指導教授に仰ぎ、東京外語の夜間部に通ってフランス語も習い、私の印度支那研究が始まったわけであるが、昭和17年（1942）9月卒業の際、卒論が「乾隆帝安南出兵の顛末について」（未発表）であり、又卒業後、新設の慶応大学語学研究所で研究員として、松本先生から与えられた最初の仕事は「政略肥後論」の注釈であった。これは明治38年（1905）田中奉一郎教授が大英博物館で発見し、コピーされた19世紀初葉の爪哇に関する中文の見聞録で、私が田中先生の手記から更に謄写して、簡単な注釈を加えたのを松本先生が史学（第22巻第1号）に掲載されたのである。

翌18年（1943）3月、私は日・仏印交換学生として河内（ハノイ）に赴き、フランス遠東学院（E. F. E. O.）にて3年間、ベトナム史とベトナム語を専攻したが、その間、昭和19年（1944）8月初からフェに1ヶ月半程滞在して研究をする機会に恵まれた。滞在中、連日のように王宮内の保大書院や国史館に通って、阮朝の実録である硃本や未刊の大南寔録第六紀附編（成泰・維新兩帝の実録）と第七紀（啓定帝の実録）を閲読したり、尊人府で阮朝の皇子譜（第一、二、三巻）と尊譜正編の各巻を披見し、大南列伝との不一致の箇所を数多く発見し

て尊人府大臣に指摘したこともあった。当時衰亡に瀕していた阮朝宮廷の奥深く、これらの貴重な史料に接し得た私の感動は計り知れないものがあり、特に阮朝硃本が充分に保管されず、その整理も殆んど行なわれていなかったことは若い史学専攻の青年を悲しませた。(詳しくは、拙稿、順化城研究旅行雑記、台湾文化、第三巻、第五期、民国37年=1948、を参照)。

終戦後、国立台湾大学で東南アジア史を担当していた私は、1954年9月から胡適先生が幹事をして居られたニューヨークの中国基金(China Foundation)のスカラシップを得て、パリ・ソルボンヌ大学の高級中国研究所に留学し、ソシエテ・アジアティックの書庫で、アンリ・マスペロ、ポール・ペリオ、オロンド・ペリオが蒐集された数多くのベトナム史籍に親しんだ。紙魚の害を防ぐため、濃褐色のうるしを張った表紙の安南本の特殊な匂いや越南独自の俗字のまじった抄本などなつかしく思い出される。ソルボンヌでの私の研究テーマは十七・八世紀越南華僑史であったので、私は鄭懷徳の嘉定通志に深く関心を持ち、フランスから帰ったのち、G. Aubaret の1863年の訳本に欠けていた同書の城池志全文とその注釈をシンガポールの南洋学報(第十二巻、第二輯、1957)に発表した。

昭和33年(1958)9月、私は南ベトナム政府教育部の招聘を受けて、新設の国立フェエ大学に客員教授として赴任した。フェエに到着すると、私は阮朝硃本の安否が気がかりで、早速城内の文化院(以前の保大書院)を訪ねた所、果して私が恐れていたとおり、終戦後の戦乱で硃本の可成りの部分が散佚し、損傷の甚しいものも多数あり、反故同然軒下に積み重ねてあったのに心を痛めた。私はその実情を松本先生に報告したが、先生も深くベトナム正史の将来を憂慮されて、やがて慶応大学の言語文化研究所で大南列伝前編、大南列伝正編(初集、二集)、大南寔録前編、大南寔録正編(第一紀から第六紀まで)の影印版による復刻を企画され、昭和36年(1961)から伊藤清司、大沢一雄、川本邦衛諸氏らの協力で続々刊行され、20余年を経て昭和59年(1984)に完結した。

一方、フェエの現地では、私は西貢考古院長の張宝林氏と語り、フェエ大学々長の高文論神父を通じて呉廷琰總統に対し、史料としての硃本の重要性を強調し、その保存と整理のための具体案を提出した。呉總統は私たちの計画を裁可し、教育部を通じてフェエ文化院に命じ、全部の硃本(計611冊)をフェエ大学の管理に移し、私にその整理を委嘱した。私はフェエ在住のベトナム漢学者六名を集めて、「越南史料編訳委員会」を組織し、私が主任委員となって、1959年7月から積極的に阮朝硃本の整理にあたった。アジア財団(The Asia Foundation)とハーバード・燕京研究所の援助を得て、先ず硃本各冊に整理番号と頁のナンバリングを附して、これを製本し直し、次いで目録の作成に取りかかった。同年11月には、嘉隆朝の分、五冊の目録が出来上ったので、翌年(1960)4月、「阮朝硃本目録、第一集、嘉隆朝」として、私の解説(越・英文)を附し、フェエ大学出版社から出版、続いて、1962年12月には明命帝初年(1820~1822)の五冊分の目録が刊行された。硃本目録作成の作業は私がベトナムから香港に移転した1962年6月当時既に明命朝の分を終えて、紹治帝の末年に及び、その後も細々と継続されたが、1963年11月呉總統が政変で倒れた後ついに打ち切らざるを得なくなった。フェエは1968年2月のテット攻勢で北ベトナム軍とアメリカ・南ベトナム連合軍間の熾烈な戦場と化した。1962年末からフェエをめぐる情勢悪化のため、ダラットの国家文書館の別館に疎開されており、1975年の南北統一作戦の際も損害を被らずに保管されているとのことである。尚、大南寔録の構成、続修、阮朝硃本の整理と現存硃本のリストについては、拙稿：「大南寔録」と阮朝硃本について、稲・舟・祭・松本信広先生追悼論文集-(1982)を参照していただきたい。

フェエ大学の越南史料編訳委員会が企画し、完成したもう一つの仕事は黎削・安南志略。校合本の出版である。明治17年(1884)岸田吟香(画家岸田劉生の父)が上海で復刻した榮善堂本の欠陥を補うため、内閣文庫、静嘉堂文庫、大英博物館所蔵の各伝本を読み合わせて作ったものであり、私の解題を付して、1961年フェエ大学から出版されたのである。古都フェエの思い出し、尽きないが、この委員会のメンバーが何れも還暦をとうくにすぎたかつての秀才・拳人たちで、史料操作の何たるかを知らず、校合作業の際に恣意で以って勝手に原文を改変してしまうのはほとほとに手を焼いた経験がある。しかし今となってはなつかしい思い出となった。尚、私の南ベトナム滞在中、1960年台北の中華叢書委員会によって、「十七世紀広南之新史料」と題して釈大汕の海外紀事が出版された。これは東洋文庫所蔵の原刊本の影印本に私の詳しい解説を附したもので、当時、鄭・阮両主の南北分争及び広南地区の華僑史に関心を抱いていた私の動向のあらわれである。

1962年6月以降、香港新亜研究所東南亜研究室の主任として、更に1964年6月から新成立の中文大学の高級講師として働いた数年は、自分の研究生活で最も充実した時期であったと思う。私の研究室には慶応から大沢一雄、可児弘明、木村宗吉の諸氏、ベトナムから段弘、ハーバードからアレキサンダー・ウッドサイド氏等の逸材が集り、アジア財団も援助を惜まず、おかげで、ベトナム史料方面だけでも次のような研究専刊や史料専刊が相次いで刊行された。

鄭懷徳撰、良斎詩集、東南亜研究専刊之一、1962

陳荆和撰、承天明卿社陳氏正譜、東南亜研究専刊之四、1964

潘叔直輯、国史遺編(阮朝嘉隆・明命・紹治三代史録の補遺)、東南亜史料専刊之一、1965

宋福玩・楊文珠輯、暹羅国路程集録、東南亜史料専刊之二、1966

上掲の四種はフェエ大学時代に蒐集した新史料で、何れも私の解説を付したものであるが、1968年8月マレー大学で開かれたアジア史国際会議には中部ベトナムの商港会安にある洋商會館の碑文を紹介し、その報告は翌1969年のSoutheast Asia Archives (vol. II, Kuala Lumpur)に全文収録された。又私はかねてから十八世紀、鄭政・鄭天賜父子の河仙鎮經營に興味を持ち、かつて国立台湾大学時代、「河仙鎮叶鎮鄭氏家譜注釈」を文史哲学報第七期(1956)に発表したが、1969年には台湾の華岡学報(第五期)に私の「河仙鄭氏世系考」が掲載された。これは河仙鎮屏山に残る鄭氏一族の墓碑を逐一紹介し、鄭家の家系をたどった研究であるので、華僑王国河仙關係の史料でもある。

昭和46年(1971)9月から、私は米国イリノイ州の南イリノイ大学ベトナム研究センターの客員教授として招かれ、カルボンデールに二年近く滞在したが、その間にフェエ大学時代蒐集した会安華僑寺廟や會館の碑文を整理し、訳文、注釈を附してHistorical Notes on Hoi-an (Faifo), Monograph Series No. 4, Center for Vietnamese Studies, S. I. U. (Carbondale), 1974として出版した。カルボンデールでのより大きな成果は同センターの阮廷和氏と計って、ベトナム史料整理プロジェクトを立て、National Endowment of Humanities (Washington)から補助費の交付をうけて大越史記全書、大越史略(旧名：越史略)、嘉定通志、大南一統志(北圻、南圻)等の史書、地志の校合本作成に取組んだことである。校合の作業は1973年9月から私が主宰する香港中文大学の東アジア研究センターで発足したが、越南の正史であり、プロジェクトの眼目ともいえるべき大越史記全書の校合本(上、中、下)三冊は10年の歳月を閲し、幾多の変遷を経て完了し、幸にも東京大学東洋文化研究所東洋学文献センターの御厚意により、同センター叢刊第42、44、47輯として昭和59年(1984)5月から昭和61年(1986)3月にかけて

て出版することが出来た。この校合本には元来の越南年号、中国歴朝の紀年以外に公元（西暦）が加えられ、同一年内に生じた史事は發生の順にアラビア数字が附けられて、使用上頗るハンディとなったが、就中、正和本刊行後に続修されながら、未だ印刷に附されなかった熙宗から愍帝に至る黎朝史最後の部分（1676-1789）が続編として5巻に分けて収録されたので、従来の全書は増補されて計29巻となり、鴻臚記から黎末に至るベトナム史をカバーすることになり、研究者に多大の便利を与えられたこととなった。尚、校合本の完結前に、全書に関する書誌学的報告を私は2篇発表した。即ち On the Various Editions of Dai Viet Su Ky Toan Thu, Occasional Paper 1, Center for East Asian Studies, C. U. H. K., Hong Kong, 1976 と「大越史記全書の撰修と伝本」、東南アジア—歴史と文化、第7号、1977であるが、校合本の上冊に載せた解題は上述2篇の所論を更に補修したものである。

大越史記全書の外に、大越史略と大南一統志（北圻、南圻）の校合作業も一応終結したが、校合に使った伝本の量と質に今少し欠けるところがあり、未だに刊行の段階に至らないのが現状である。1980年、山本達郎博士古稀記念論文集にのせた拙稿、「大越史略」—その内容と編者—は謂わばその中間報告である。

越南史料整理プロジェクトとは別に、1980年中文大学出版社から、私の編注で、阮述の「往津日記」が出版されている。これはコレージュ・ド・フランス教授戴密微（P. Demiéville）先生の蔵書で、饒宗頤教授を通じて、私に注釈を附して出版するようにとすすめられたものである。阮述は嗣徳朝末期の能吏で、1882年、当時ベトナム問題でフランス側と交渉していた李鴻章の諮問に具えるため、フエの宮廷から天津に派遣され、翌1883年帰国した人物である。内容は日記の体裁で、往復の旅程、香港、廣州、上海、天津の概況及び阮氏と内外人士との往来に就いて誌してあり、中越関係史に関する貴重な補助史料である。

このように列挙してみると、過去40年に垂んとする研究生活で、私は可成り広くベトナム史料に係わり合い、付き合ってきた感じがする。史料の整理・校合は謂わば緑の下の力持ちの仕事である。その目立たない作業を自らに課したのは史学科在学以来、松本信広先生の薫陶を受け、ペリオ、マスベロ、杉本直治郎、山本達郎諸教授の優れた印度支那史研究論文をよみ、その間に感得した実証主義の影響もさることながら、「テクニスト・クリティーク」を欠く記録は史料に非ず」となす信条に心から服膺するに至ったからであると思う。歴史研究が真実の解明・探索である以上、テクニスト・クリティークを充分に加えていない記録・文書を史料として引用したり、縮訳したりする事は誠に軽率且つ危険なことであり、場合によっては時間の浪費にしかなりかねない。嘗て若い史学生を訓練する方法として、名著を読ませたり、正史や古典の索引を作らせたりすることが流行ったが、幾種かの伝本を持つ史書を選んで、校合本を作らせることも又科学的・客観的歴史研究法を習得するのに有益であると思う。

私のベトナム史料との付き合いは当分つきそうである。最善を尽し、周密に考証を加えた、信頼しうる史料を学界に提供することは歴史研究の堅実な発展に寄与するのみならず、史学専攻の人間にとって、後進に対する重要な責務であるとも云えよう。能力の限られた人間であるから、その公にした労作の中には誤解、錯簡、逸脱、前後撞着やミスプリントの箇所も介在するであろう。それは挙げて同僚の士の斧正に待つ、批判があれば、それを謙虚に受入れ、弁法を講じて是正する、それが学問本来の有り方ではなかろうか。

（1986年3月30日）

（創価大学教授、文庫）

蘭印における交通・通信網の拡大

土屋健治

このほど、加納啓良編『内務行政雑誌』所収論文・記事目録が、「東洋学文献センター叢刊・別冊13」（1985年12月）として刊行された。編者の解題にある通り、この『内務行政雑誌』Tijdschrift voor het Binnenlands Bestuur は、1887年から1917年まで、植民地内務官僚有志たちによって刊行された月刊誌である。加納氏はまた、すでに十数年前に、『植民地雑誌』Koloniaal Tijdschrift の所収論文目録を、大木昌氏と共同で完成させている（加納・大木編『植民地雑誌』所収論文目録『アジア経済研究所内資料・調査研究部No.47-48、1972年。これは、「東洋学文献センター叢刊第43輯」として改訂稿が1984年に再刊）。こちらの方は、「蘭印内務官僚連盟」の定期機関誌として1912年から41年まで、ハーグで刊行されている。両雑誌の目録化が、インドネシア地域研究者に裨益するところ多大であることはいうまでもない。二つの雑誌は奇しくもそれぞれ30年の寿命をもつが、それらが刊行されていた19世紀末から20世紀半ばの植民地は、周知の通り、あらゆる側面で大きな変容を遂げていた。なかでも、植民地国家を支えるインフラ・ストラクチャーは、この時期に、顕著に整備され拡充されていたといえよう。

以下に、それを交通・通信のネットワークの創設と拡大ということに限って概観してみたい。

（1）鉄道と航路。鉄道の敷設はジャワとスマトラで行われた。ジャワ島では1867年にスマラン＝タンダング間25kmが最初に開通したが、以後この島の鉄道網は年ごとに緊密化し、1925年までには今日みられる鉄道網がすべて完成した。スマトラでも19世紀末以降、東海岸のメダンと西海岸のパダンを拠点とする鉄道網の建設がすすめられていった。

植民地全域での鉄道延長総キロ数を示すと第1図の通りである。また、鉄道の利用客数をジャワ島に限ってみると第2図の通りである。これから知られる通り、植民地ではかつてない規模で人々移動する時代が訪れたのである。

鉄道と並ぶ大量輸送機関である船舶航路も、1870年にスエズ運河が開通したのを契機として、そのネットワークは飛躍的に拡大し緊密化していった。1902年に、ジャワ＝中国＝日本航路、05年にジャワ＝ラングーン＝ベンガル航路が就航したのを始め、10年当時には、ロッテルダムとバタヴィアを36日で結ぶ週一便の定期船が運行するようになった。

さらに、1928年以降は、KLMの定期飛行便がオランダと植民地の間を結ぶようになった。

（2）郵便。鉄道であれ船舶であれ、郵便物を中心とする情報の運搬手段を著しく高めるものであった。かつて総督エムデン（1808～1811）は、ジャワ島の東西を結ぶ千キロの「郵便道路」を建設した。これにより、それまで40日を要したとされる東西間の連絡はわずか6日に短縮されたが、鉄道はそれをさらに1日半に短縮した。郵便馬車に代わって郵便列車が走り、1746年に初めてバタヴィアに設立された郵便局は、1917年までに1040箇所に設置されるに至った。

一方航路の発展は、そのまま、郵船の発展を意味した。すでに、1812年にジャワ島西端のアニャルとスマトラのベンクルーを結ぶ郵船が就航したが、その後、この内国郵船網は年ごとに拡大し、52年には、バタヴィア＝スラバヤ＝マカッサル＝テルナタ＝アンボン＝メナドを巡航

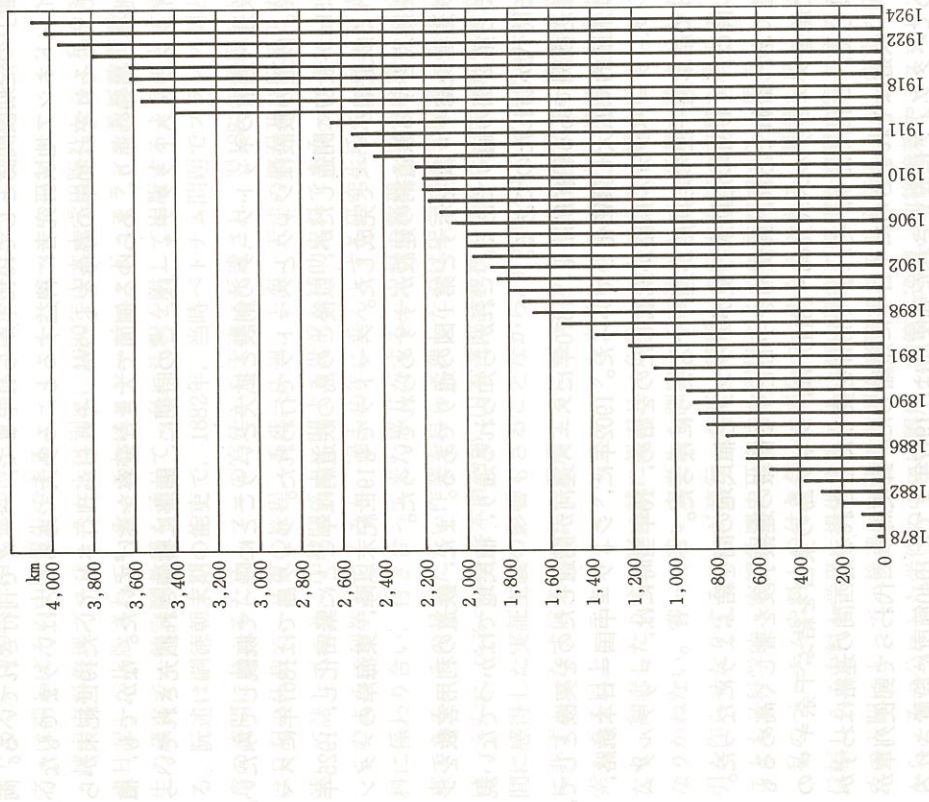
する郵船が開かれた。そして1890年までには、植民地の主要な拠点がこの郵船網ですべて結ばれるに至った。

公信であれ私信であれ、また、新聞であれ、雑誌であれ、おびただしい数の文書がこれらのネットワークをめぐって環流していったことはいままでもない。

(3) 電信と電話。情報伝達の速さと直接性という点で、電信と電話が画期的な手段であったことはいままでもない。

電信回線の敷設はパタヴィア＝ボゴール間で初めて行われ1856年に完成した。翌57年にはジャカルタ＝スラバヤ間とスマラン＝アンバラワ間の回線が敷設され、59年迄に回線総延長2700km、電信局27に及んだ。66年からはスマトラとカリマンタンでも敷設工事が開始された。

一方、海底ケーブルの敷設も59年に開始され、88年にジャワとバリが結ばれたのを手はじめに、植民地の各地が結びつけられていった。その進展状況を示せば次の通りである。

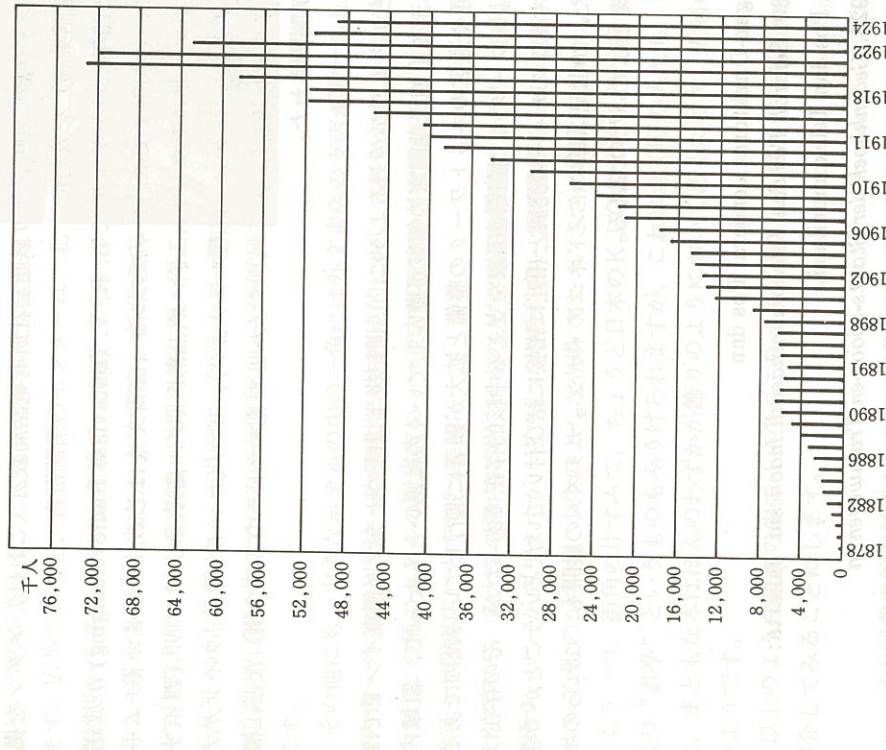


出典：Reitsma (1925: 80)

第1図 オランダ領東インド国管鉄道延長キロ数（広軌と狭軌の合計）

総延長が1万5,000kmに達した。これは、オランダ領東インド国管鉄道の総延長が1万5,000kmに達したことを示している。

- 1888, Jawa (Situbondo) - Bali (Singaraja) - Sulawesi (Makassar) ;
- 1889, Jawa (Gresik) - Madura (Bangkalan) ;
- 1892, Sumatra (Medan - Oelheu) ;
- 1897, Sumatra (Oelheu) - Pulau We (Sabang) ;
- 1897, Bali (Singaraja) - Lombok (Ampanan) ;
- 1901, Jawa (Situbondo) - Kalimantan (Banjarmasin) ;
- 1903, Kalimantan (Balikpapan) - Sulawesi (Kwandang dan Manado) ;
- 1904, Biliton - Bangka (Pangkalpinang - Muntok) - Sumatra (Palembang) ;
- 1905, Sulawesi (Makassar) - Kalimantan (Balikpapan) ;
- 1907, Kalimantan (Muara Pegatan) - P. Laut (Kumang Kumang) ;
- 1909, Sumatra (Medan) - Pulau We (Sabang) ;
- 1910, Jawa (Situbondo) - Sulawesi (Makassar) ;



出典：Reitsma (1925: 178)

第2図 ジャワ島の旅客延べ数

を行なったものです。

例えば、『百川学海』（一名左氏百川学海）についての説は、

- 1912, Jawa (Anyer) - Sumatra (Kalianda);
- 1912, Sumatra (Padang - Sibolga);
- 1913, Sumatra (Padang) - Jawa (Jakarta - Semarang - Surabaya);
- 1914, Sulawesi (Kema) - Ternate - Sulawesi (Kema-Gorontalo);
- 1913, Jawa (Surabaya) - Kalimantan (Balikpapan);
- 1913, Kalimantan (Balikpapan) - Sulawesi (Manado);

出典：Departemen [1980 : 98]

電話回線も19世紀末から敷設された。先ず1896年にバタヴィア＝スマラン間とバタヴィア＝スラバヤ間が開通し、98年にはバタヴィア＝ボゴール＝スカブミ＝バンボン間の回線が開通した。今世紀の10年代以降はスマトラでの敷設工事も始まった。さらに海底ケーブルを利用してジャワとマドゥラ、スマトラとカリマンタンの敷設工事も始まった。34年以降には自動式電話の導入も開始された。こうして1941年において、電話局総数122 (内ジャワ島に65)、補助電話局総数219 (内ジャワ島に200)、デリ鉄道会社所有電話局数21 (これは、メダンを拠点とする私企業による電話業務) を数えた。

(4) ラジオ放送。1925年にバタヴィアで B. R. V. (Bataviase Radiovereniging) が放送を開始したのを皮切りに、1926年までに、ジャワのシティボンドをはじめ、クーバン (チムール島)、アンボン、トモハン (北スラウェシ)、バンダ、ボボ (ブル島)、マノクワリ (西イリアン)、メラウケ (西イリアン)、ブトン (東南スラウェシ)、ビマ (ロンボック)、ワインガブ (スンバ島)、エンデ (フロレス島)、メダン、ベンカリス (スマトラのリアウ州) など、植民地の各地でラジオ局が開設された。

以上に概観したところからもうかがえるように、19世紀後半以降のオランダ領東インドでは、「サンバンからメラウケに至る」植民地国家の領域が確定していくのにならって、領域内の各地を結びつける交通や通信のネットワークの整備と拡大が顕著に進行していったのである。「蘭印内務官僚」のネットワークは、植民地国家を支える中核的存在であったが、その存在はこのようなインフラ・ストラクチャーの発展と相互に密接に結び付いていたということができるであろう。さらにまた、20世紀以降のインドネシア・ナショナルイズムの展開も、これらのネットワークの存在を前提としていたのである。

(文献)

Departemen Perhubungan-Direktorat Jenderal Pos dan

Telekomunikasi. 1980. *Sejarah Pos dan Telekomunikasi di Indonesia*. Jakarta:

Direktorat Jenderal Pos dan Telekomunikasi.

Reitsma, S. A. (ed) 1925. *Gedenkboek der Staats-spoor-en Tramwegen in*

Nederlandsch-Indië. Weltevreden: Topografische Inrichting.

(京都大学東南アジア研究センター助教授)

広州だより

— 近刊購入の書目・書誌など —

澤谷昭次

S君、お元気ですか。広州での小生の活動の一端を伝えて欲しいとのご希望ですが、いま広州で最も印象的な出来事である“現代化＝開放化”をめぐっての所見と、広州市を中心とした幾つかの史蹟めぐりについては、それぞれ一文を草しましたので¹⁾、今回は、広州での書籍購入の実況をお伝えしてみよう。

中国のどこの都市でも似たような状況かとは思いますが、大体は中心街のどこかに大きな新華書店というのがあって、たいていの本はそこで買えます。広州でいうと、書籍関係のセンターは、北京路という名前のついた町筋で、500米ぐらいの間に、新華書店 (中央店)、外文書店・新華書店科学技術書部・同児童書部・同期刊雑誌部・同工具書部・同古籍部といった具合に、ズラリと一筋の道路の片側に並んでいるのが便利といえ便利です。



書店の店頭風景

その他にも、大きなホテルの中の一角には外文書店の支店が設けられていて、観光客向けの案内書・外文書・図録・絵葉書などを重点的に置いてあります。小生がもっぱら愛用していたのは、この種のホテルの附属店の一つ東方賓館内の外文書店と、前述した北京路の新華書店古籍部 (古籍書店) とでした。

もちろん、各大学の構内にも、日本の大学生協書籍部のような、日用必需品の売店の一角に書籍コーナーがありますが、どうしても教科書・参考書類ないしは流行読物・児童書・家庭書といったものが多く、小生のような立場では、いささか物足りません。

もう一つ、街角の片すみで、ちょうど日本のKIOSKのような形で、小じんまりした売店風の“書亭”というものもみうけられますが、これは全く町の人たち、それも通行人相手の店で、まともな本はほんのわずかが飾りのようにおいてあるだけで、近刊の新聞・雑誌類が中心のようです。

以上のような概況の中で、小生がこれまでに購入した図書館関係の書物を、以下に何点か紹介してみます。

- ① 『中国叢書綜録補正』 (1984, 江蘇広陵古籍刻印社。294頁, 索引17頁。印数7,000)

これは、湖北省図書館の陽海清という人が“編撰”したもので、例の上海図書館から出た『中国叢書綜録』第一冊 (總目) について、その内容特に出版事項の検討を中心に詳しい補正を行ったものです。

例えば、『百川学海』 (一名左氏百川学海) についての條は、

宋咸淳刊本。按、是刻半頁十二行，行二十字，小字雙行字数同；細黒口，左右雙辺。北京図書館蔵。

明鈔本（北京図書館蔵）

民国十六年至十九年（1927～30）武進陶氏涉園據宋咸淳本景刊本。按、咸淳本原缺五冊，據明弘治華氏覆宋本仿咸淳本字体摹補；十九年（1930）依宋本目次編印，封面題《左氏百川学海》。

1960年中華書局新印本。按、據武進陶氏涉園景宋咸淳本印行，題名《左氏百川学海》。

1981年北京中国書店、用陶湘原版重印本。

といった具合に、咸淳本から1981年景印本に至るまでの経緯が詳細に辿られています。これは、小生たちが、もとの『綜録』だけを頼りにして東大東洋文化研究所の目録を編纂したときの苦労の大半を解消してくれているといっているもので、今後の漢籍担当職員たちの必見の参考書になるでしょう。

②『中国古籍印刷史』（1984、印刷工業出版社。245頁、印数8,000）

この本は、第一編 雕版印刷發明前の古籍図書、第二編 古籍雕版印刷發展史、第三編 活字印刷術的發明和活字印書業的發展 という三部構成ですが、第二編（32～203頁）が量・質ともに中心部分で、各時代を逐って木版印刷の実情を詳細に解説してくれています。挿図も比較的多く、全体としての出来具合が毛春翔『古籍版本常識』の口語体版といった印象です。両者を座右において、関係部分をつぎ合わせてみたら、とても興味深く縦覧できるでしょうし、また実務上も役に立つ本だと思います。著者の魏隱儒という人は、前言その他から推測するに、北京で古籍の景印を中心に行っている中国書店の関係者ではないかと思われれます。

③『中国古代目録学簡編』（1983、重慶出版社。236頁、印数8,200。）

これは、四川師範大学歴史系の羅孟頌という人の著作で、第一章 緒論（目録学概論）、第二章 中国目録学的發展（上）——先秦から隋まで——、第三章 同（下）——唐以後、書目答問まで——、第四章 版本学与校讐学、といった項目立てで、第二・三章が中心部分ですが、引用文献が比較的丁寧処理されているのが特長ともいえます。小生の記憶では、今手元がないので一寸ハッキリしませんが、来新夏の『古典目録学浅説』（1981）が、分量的にも、ほぼ似たような内容構成のものだったと思います。

④『北京図書館蔵革命歴史文献簡目』（1984、書目文献出版社。630頁、印数8,200）

これは、新中国成立後に北京図書館に受け入れられた、解放前時代の革命歴史文献を集大成した目録です。若干の文書およびコピー文献も混っていますが、原則として出版物に限られています。ここに出ている文献は、とにかく北京図書館に行けば存在しているということで、請求番号付きですから、交渉の事情次第では閲覧はもとより、複写依頼も可能だと思われれますが、近現代史の研究者にとっては、大きな福音でしょう②）。

以上、小生がたまたま入手したものの中で、比較的発行部数の少なそうなものを幾つか紹介してみました。それというのも、中国の書籍出版状況は、ここ数年で大きな変動期にさしかかっていると思われ、基本的には計画出版版なのですが、ものによっては営利出版的な傾向が見られますし、いわゆるベストセラーが中央で突出している一方では、学術書・専門書類が地方の

目立たない小出版社から細々と出ているといった印象もあります。上記の出版物が、どのくらい日本に輸入されているのか、いずれもすぐれた役に立つ書物だと思われだけに気にかかる次第です。

以下は、本題からややはずれた余談ですが、現在の中国出版界に見られる特異な動向の一つは、いわゆる現代化＝開放化の波と呼応して、外国文学・外国事情の翻訳・紹介が目立って増加していることだと思えます。

例えば、以下に列挙するのは、小生の入手し得た範囲内での紹介ですが、

①『万葉集』上・下冊（選訳本）1984、湖南人民出版社。印数22,000。

②『平家物語』（全訳本）1984、北京人民出版社。印数52,000③）。

③『三十四郎』（全訳本）1983～84、上海訳文出版社。印数96,000。

④『舞姫』（川端康成、全訳本）1985、北京外国文学出版社。印数56,000。

⑤『羅生門』（シナリオ全訳本）1979～84、北京中国電影出版社。印数35,000。

⑥『蒼茫時分——山口百恵自伝』（抄訳本）1982～84、北京中国電影出版社。印数3,600,000。

⑦『阿信』（梗概本）1985、天津百花文芸出版社。印数125,000。

⑧『双曲裁的殺人案』（西村京太郎、全訳本）1985、海南人民出版社。印数80,000。

⑨『孤雁行——高倉健影壇生活』（肖亦艾訳、孫日明校）1985、漓江出版社。印数83,000。

⑩山口百恵自伝⑦のNHKテレビの『おしん』の梗概が、それぞれズバ抜けた発行部数であるのはやや特例なのかもしれません。⑧や⑨がそれぞれ海南島や広西省といった場所から予想外に量産されているらしいのを目にすると、前述した目録・書誌関係の書物の発行部数と比べて、いまこの国で何がどのように動こうとしているのか、ヒジヒジと伝わってくる感じがするのです。そのこと自体は非常に興味深い事実だと思いますし、また他の外国文学・外国事情関係の翻訳・紹介ぶりなども比較して、冷静で妥当な判断をするべきだと思われれますが、一方で、日本における外国研究特に中国研究の実況などと比べ合わせてみたりした場合、いわゆる現代化＝開放化の未来の中で、漢籍（＝中国語文献）整理関係の仕事にたずさわる者の一員として、どのような対応をしてゆくべきなのかと、甚だ複雑な心境にならざるを得ない今日の頃です。

（60. 11. 25記。）

〔補注〕

1) ともに“広州だより”と題して、前者は『けんぶん 4』（1986. 2. 研文出版）、後者は『盈虚集 第三号』（1986. 3. 立教大学東洋史同学会）に寄稿したものです。

2) 上記の他にも、その後入手したのとしては、

○『中国古代理書目録』第一冊（中国古代理書目録整理組編、1984、文物出版社。印数不明）

○『中国地方志聯合目録』（中国科学院北京天文台主編、1985、中華書局。印数9,100）

○『古籍版本鑑定叢談』（魏隱儒・王金雨編著、1984、印刷工業出版社。印数10,000）

○『書籍装幀芸術簡史』（邱陵編著、1984、黒竜江人民出版社。印数4,100）

などがあって、それぞれ特色のある内容のもので、紹介はまたの機会に譲ります。

3) ちなみに、1982～83年にかけて出版された豊子愷訳『源氏物語』（人民文学出版社）は、上（245,000）中（225,000）下（215,000）という印数です。（61. 4. 16補注）

（山口大学教養部教授）

〔注〕澤谷氏は、広州外国語学院に日本専攻として1985年3月から1年間滞在された。

清末・民国年間刊行新聞・雑誌リプリント類

購入リスト その2 ('86.3.31現在)

安徽俗語報	第1～第22期：1904年3月－1905年8月
華商報	1941年4月－12月，1946年1月－3月，1947年1月－3月
共進	第1～第105期：1921年10月－1926年9月
湖南民報	1926年11月－1927年5月
少年	第2～第12期：1922年－1923年
秦鐘	第1～第6期：1920年1月－6月
政治生活	1924年4月－1926年7月
淺草	第1巻第1～第4期：民国12年3月－14年2月
中国学生	第1～第4期：1925年8月－1927年3月
中国婦女	第1～第2巻：1939年6月－1941年3月
文学週報	第1～第380期：1921年－1929年
文獻	第1～第3：民国27年10月－28年5月
創造月刊	第1巻第1～第2巻第6期：1926年3月－1929年1月

東洋学文献センター運営委員会委員（昭和61年度）

東洋文化研究所教授(委員長)	松丸道雄	東洋文化研究所教授	尾上兼英
附属図書館長	山崎弘	教授	鎌田茂雄
法学部教授	渡辺浩	教授	田中一
文学部教授	溝口雄三	教授	斯波義信
農学部教授	今村奈良臣	教授	板垣雄三
経済学部助教授	武田晴人	助教授	蜂屋邦夫
教養学部教授	丸山晴松	助教授	猪口孝
社会科学研究所教授	近藤邦康	助教授	加納啓良
		助教授	宮脇博史

東洋学文献センター教官

センター長	教授(併任)	山崎利男
センター主任	教授(併任)	松丸道雄
	教授(併任)	松丸道雄
	助教授(兼務)	宮脇博史
助手	山之内正彦	

東洋学文献センター専門委員会委員

教授	松丸道雄(委員長)
助教授	宮脇博史(委員長代理)
助教授	蜂屋邦夫
助教授	猪口孝
助教授	加納啓良

「東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター報」センター通信 No.27 1986年6月25日
東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター発行 東京都文京区本郷7丁目3番1号

電話 03-812-2111 (内線) 5839

センター通信

No.28 1987.9

センター叢刊の充実に向けて

田 仲 一 成

本年四月にセンター主任に就任し、今年度の責任を負うことになった。この機会にセンター叢刊の刊行業務につき、回顧と展望をのべておきたい。

昭和41年発足当初の頃から、本センターは独自のドキュメンテーション活動の一環として、センター叢刊の刊行に力を入れてきた。以来二十余年の間、毎年数点づつ号を重ね、昨年度をもって本巻52巻、別巻13巻を数えるに至っている。顧みるに、昭和41年度にこの叢刊を企画した当初においては、適当な資料が継続して得られるか否かについて、必ずしも見通しが立たないまま、とにかく50巻までやってゆくことを第一の目標として努力を重ねてきた（尾上教授談）。途中からA5版の本巻に対してB5版の別巻の刊行をも併行してはじめてため、実質的には、昭和57年度に合計50巻の目的は達成していたことになる。しかし、編集者の感覚としては、あくまでA5版の本巻を早く50巻までやってゆきたいというのが当初からの念願であったから、昨年度、第48～52巻を刊行し、遂に当初の目標であった50巻のラインに到達することができたことは、発足時の草創段階に関与した者の一人として、これにより一時期が画されたものとして一入の感慨を禁じ得ない。既に退任された諸先輩と共にこの画期を喜びたい。

さて、再びふりかえってみると、この二十年の間、叢刊の内容は幾度かの曲折を経てきている。当初は、センターとしての効率上の観点から文献蒐集、文献活動の範囲を、研究所の従来の蓄積によりかかる方向で設定したため、センター叢刊の対象も自ら限定を受け、旧中国の政治・法律、戯曲小説、現代中国の社会科学、人文科学文献、及び現代朝鮮の社会科学、人文科学文献的をしばっていた。しかし実際には、中国文献に関する限り、ここにあげられた特定のジャンルや時代に限らず、広く各代各分野にわたって各種の資料集を刊行してきた。概していえば、初期には文学に傾斜していたが、次第に歴史文献に重点を移してきたと言えよう。但

し、朝鮮文献については、センター独自の編集計画が立たず、手薄になっていたことは否定できない。

ところで、本輯が漸やく36輯に到達した昭和56年度に至り、本センターの附設本体である東洋文化研究所が改組され、大部門制に移行した。この時点でセンターの運営方針にも再検討が加えられ、その文献業務の範囲も従来の中国、朝鮮からアジア全域に拡大することとなった。これに伴ない、センター叢刊の刊行対象もまた、自ら、南アジア、西アジア、東南アジア等の文献をも含むように拡大された。かくして、この頃からセンター叢刊として、チベット文献、ベトナム文献、インドネシア文献などが加えられるようになる。この点、叢刊各冊の末尾に載せる「発刊趣意書」の文言は、実情に合わなくなってきたわけであり、今後、この文言を改めたいと考えている。

このようにセンター叢刊の性格は特に昭和56年度以降、初期の頃に比べて変化してきているのであるが、その一つの現われと目し得るのは、編者や資料提供者に国外の研究者が加わりはじめているという点である。中国の人類学者李安宅教授のチベット寺院ラプランの報告、香港中文大学の陳荆和教授（現創価大学）の『大越史記全書』などがこれに当たるが、近号では、香港政府の歴史学者のヘイズ博士の提供、香港中文大学のフォール博士の監修にかかる『広東宗族契據彙編』もこの例に入る。このような編者の国際化の傾向は、研究の国際化と共に今後とも一層強まるものと考えられる。

別に最近、編集方法の上にも新しい傾向が現われはじめている。コンピューターへの入力をも目的とした資料、或はコンピューターを利用した成果としての資料がそれである。例えば、第51輯『中華人民共和国・朝鮮民主主義人民共和国 職官歴任表』*は前者の例であり、第52輯『韓国政治エリート研究資料——職位と略歴——』は後者の例である。このような刊行物は、今後も索引類を中心に増加するものと予想される。

以上のごとく、センター叢刊の内容は、今後、益々、国際化し、また多様化して行く方向にあるが、センターとしては、この刊行事業を引きつづき文献活動の軸に据え、従来手薄であった部分（例えば朝鮮、インドなど）をも補いつつ、その充実をはかって行く方針である。利用者各位の一層の御鞭撻をお願いしておきたい。

* 本輯については、編輯を委託した研究協力者の拓殖大学・秦郁彦教授と本センターとの間に、刊行事務をめぐって理解の食い違いが生じ、同教授はこの件に関し、1987年1月号S誌上に一文を公表された。食い違いの原因に関しては、本センターはかねてより秦教授とは異なった見解を留保しており、その旨、同教授に伝えてあったが、同文の公表後、双方の話し合いの中で、改めて同教授に対し当方の立場を詳細に伝えた。またその際、同文中に、この問題の当事者とは直接の関係のない、センター以外の第三者（本研究所本体を含む）に不快感を与える表現が含まれている点につき、同教授より当方に対し釈明があった。本輯の刊行事務は既に終了し、現在、双方の間には何らの問題も存在していない。ただ、本センターとしては、問題をめぐる言論の推移のうちに、思いがけず学内外の研究機関に御迷惑を及ぼした点につき、ここに関係の方々に対し改めてお詫び申しあげる。

（東洋学文献センター主任）

中国古籍、文献学関係近刊数種簡介

池 田 温

易類

書類

卷二 詩類

礼類（周礼・儀礼・礼記・三礼総義・

通礼・雜礼書）

衆類

卷三 春秋類（集編・左伝・公羊伝・穀梁伝・春秋総義）

孝經類

四書類（論語・孟子・大学・中庸・四書総義）

小学類（集編・訓詁・字書・韻書）

附 録（六芸綱目）

藏書單位代名表

藏書單位檢索表

所収善本は古刊本（多く明版以前、時に清代乾隆以前を含む）、写本・稿本及び学者・收藏家等の価値あるかきいれや跋語等のあるもので、歴史的文化的財としての価値はもとより、学術資料性、芸術品としての代表性も考慮し、なお流伝の稀な古籍はおおむね収録する方針で編集されている。

内容が経部に限られる叢書は本書に収められ、子目詳細で掲出される。収録書は1点ずつ書名・巻数、撰者、刊写事項を確認できる限り明記するが、冊数・版型・行格・初印後印の別・保存状態等にはふれない。

本書に収める所、計28省、市、自治区の782機関所蔵の5239項に達する。これは経部だけの数字であるから四部、叢書がそろえば数万点に上るであろう。本書の内容がいかに画期的で重要なものであるかは、この数字を一見しただけで自明である。

1976年文革終熄以後、中国において學術研究が急速に復興するにつれ、古籍整理の必要性がさげばれ、全国的な規模で種々の新企画が生まれその推進がはかられてきたことは周知の通りである。センター通信23号に胡道静氏の建議になる漢籍センサスへの展望を記載してからすでに4年余を経過したが、近年めざましい成果が続々と現れているので、その一端を簡単に紹介し、中国文献の整理に関心をもち方々の参考に資したい。

中国古籍善本書目編輯委員會編 《中国古籍善本書目（経部）》

（上海古籍出版社 1986年6月（封面背は1985年10月）、線装1函5冊、2100部、95元）

本書前言によると、重病の周恩来総理によって「全国善本書総目」をできるかぎり速やかに編纂せよ」との重要指示が出されたのは1975年10月であった。78年3月に国家文物事業管理局が南京に会議を開催し、その具体化に向けて《中国古籍善本書目》編成のため、収録範囲や著録条例・分類表等を作製し、全国の各部図書館事業管理局の指導下に各省、市、自治区の図書館から人員が北京に派遣され、本格的編纂作業にとりかかり、81年正月には目錄草稿を作り〈徵求意見稿〉の形で各図書館に送って現物と対査し、同時に専門諸学者に書面で意見を求め、83年8月からは完成原稿の作製を始め、経、史、子、集、叢の五部に分って出版することとなった。まず第1に公開を見たのがこの経部の5冊である。その内容は下の如く分類編成されている。

卷一 総類

本書所収書の収蔵機関の地方的分布を表示すると次のようになる。

- | | | |
|----|------------|----|
| 1 | 北京市 | 47 |
| 2 | 上海市 | 17 |
| 3 | 天津市 | 11 |
| 4 | 河北省 | 16 |
| 5 | 山西省 | 47 |
| 6 | 内蒙古自治区 | 5 |
| 7 | 遼寧省 | 19 |
| 8 | 吉林省 | 8 |
| 9 | 黒龍江省 | 19 |
| 10 | 陝西省 | 55 |
| 11 | 甘肅省 | 16 |
| 12 | 寧夏回族自治区 | 3 |
| 13 | 青海省 | 5 |
| 14 | 新疆維吾爾自治区 | 8 |
| 15 | 山東省 | 49 |
| 16 | 江蘇省 | 65 |
| 17 | 浙江省 | 54 |
| 18 | 安徽省 | 18 |
| 19 | 江西省 | 43 |
| 20 | 福建省 | 32 |
| 21 | 台湾省 (暫缺) | |
| 22 | 河南省 | 34 |
| 23 | 湖北省 | 58 |
| 24 | 湖南省 | 24 |
| 25 | 広東省 | 44 |
| 26 | 広西壮族自治区 | 15 |
| 27 | 四川省 | 37 |
| 28 | 貴州省 | 10 |
| 29 | 雲南省 | 23 |
| 30 | 西蔵自治区 (暫缺) | |

第5冊に含まれる蔵書単位代号表に、各機関の対応数字が表示され、その数字により何書が何機関にあるかを一覽表としたのが最後の蔵書単位檢索表である。

5千数百項の書物の過半は一箇所にしかないものであるが、同一書が数機関にあるものも少なくなく、(明)万曆44年閏斎辰刻朱墨套印本《春秋左伝》一五卷は実に72機関に蔵さ

れ、(明)天啓六年郎氏堂策監刻本《五雅》四一巻は47機関にある如き情況が、この檢索表により一目で知られる。

もとより北京図書館、上海図書館などに善本の多い(易と書類計1139項中北京図書館に約280点、上海図書館に210余点ある)ことはいうまでもないが、従来善本目録の刊行された機関は限られており、文革後の時点で全国的にこれだけ多数の図書館等について調査著録された成果は大変貴重であり、善本の主要部分の所在はまず本目が手がかりとなる点に疑いない。但し本書未収の善本も決して稀ではないと思われ、本書を網羅的なものと過信してはならない。《孝經》についてみると、玄宗注本の(元)岳氏家塾刻本、玄宗注・邢昺疏本の(元)泰定三年刻本(北京図書館蔵)が所収最古の例であるが、新疆の吐魯番盆地の墳墓から北朝写本が出土しており、広い中国には宋金以前の刊・写本が少なからず伝存していると思像することが許されよう。そうした意味合いから、本書は今後の善本搜訪活動推進への新たな基盤を提供したものとみなされる。

中国科学院北京天文台主編 《中国地方志聯合目錄》

(北京 中華書局, 1985年1月, 854頁+書名索引111頁, 9100部, 9.20元)

本書は、中国全国の190に上る図書館等に収蔵される、1949年以前に編纂された歴代地方志計8200余種を地域順に集録した大冊である。収録範囲は通志、府志、州志、府志、県志、郷土志、里鎮志、衛志、所志、関志、島嶼志や方志の初稿の性質を有する志料、採訪冊、調査記等に及び、山志、水志、寺廟志、名勝志の類は含まない。《台湾公蔵方志聯合目錄》を参照し、台湾省所蔵方志も収録されているので、中国における主要機関の所蔵する方志は殆ど網羅されているといつてよく、別に編纂される《新編中国地方志目錄》(1949

年以降の方志を対象)と併せて、中国の地方志に関する最大かつ最も基本的な目録とみられる。

北京天文台が主編の任に当たったのは、中国科学院、教育部と国家文物事業管理局の委託をうけ1975年以來「中国天文史料センサス整理編集グループ」の作業に關連し、地方志のユニオンカタログ作製の必要が起ったからである。本書は総編に莊威鳳(北京天文台)・朱士嘉(湖北省文史館)・馮宝琳(北京図書館)3氏が任じ、王素萍(広西第二図書館)・江煥文(安徽省図書館)・李秉乾(厦門大図書館)・沈燮元(南京図書館)・許仲凱(福建師大図書館)・陳培榮(首都図書館)・張勝沢(重慶市図書館)・漆身起(江西省図書館)・蔣光田(科学院図書館)・劉志盛(湖南省図書館)の10名が編輯、吳豊培(中央民族学院)・張秀民・楊殿珣の3氏が編纂に任ずる協同作業で作製された。

1976年に始まった編纂事業は朱士嘉氏の修訂版《中国地方志綜録》(1962)をもとに、諸図書館と連絡をとって補充と改修に努め、78年に初稿を編成し、更に諸機関の意見をきき、又上海図書館・中央民族学院図書館・天津市人民図書館等の新編地方志目録や《台湾公蔵方志聯合目錄》、日本の《中国地方志聯合目錄》まで参照して子細に再檢修訂を加え、7年の努力で完成にこぎつけたという。

今後は中国地方志については本書がまず第一に参照される基本目録となることは明らかである。配列の順序は北京・上海・天津市に始まり貴州・雲南・西蔵に終る行政区分の体系により、省内の配列も今日の地方行政の市・地区順になっている。

日本にある中国地志は、国会図書館参考書誌部編の《日本主要図書館・研究所所蔵中国地方志総合目錄》(1969)に収載されるものが約4000件を算えるが、本書の収録はその2倍を超える。特に民国年代の方志はわが国で見られぬものが多く、その蒐集が日本の図書

館の今後の課題となる。

《自莊嚴堪善本書目》

(天津古籍出版社, 1985年7月, 141頁, 3960部, 1.45元)

本書は著名な実業家でまた善本の収蔵鑑識できこえた周暹氏(字叔弢, 1890—1984)が、1952年国家に献納し北京図書館所蔵となった善本715種の分類目録である。巻頭に傅增湘の《周君叔弢勘書図序》(1936)と謝国楨の序(1981)がある他、書影50点の図版があり、蒐書の由来、特性を諒解し、その精華を鑑賞することができる。

編纂に当たったのは北京図書館善本室の冀淑英女士であり、目録の記述は北京図書館の伝統に従い、書物の重要性に応じて詳略の幅をもたせ、必要に応じ避諱欠筆や刻工等まで言及し、印記や著録に及ぶ。

周氏は蒐書のみならず、勘書・校書に努め題識を加えることが多かった。本書には53点の蔵書に附された題記が目録の後に集録されており、周氏の見識を窺うことができる。

巻末には周氏の令息珏良氏の後記があり、周氏の蒐書がいかなる深慮と愛国心によって作り出され、又国家に捐獻されたかを語って余す所がない。周氏は5つの標準で善本を厳選した。すなわち1は版刻、2は紙張印刷、3は題跋、4は収蔵印章、5は裝潢で、これら5項がみな良好のものを努めて購収したのである。その質の高さは巻頭書影の中だけで、《周礼注》《礼記注》《三礼図集註》《春秋經伝集解》《晋書》《建康実録》《新序》《蘭亭統考》《漢官儀》《清波雜志》《山海經》《妙法蓮華經》《華嚴經》《南華真經》《陶靖節先生詩註》《寒山子集》《王摩詰文集》《孟東野文集》《鄭守愚文集》と実に19種の宋刊本が揃い、その殆どが完本乃至それに近いもので、内容も価値の大きい要籍であるのによく示されている。謝氏の序に、解放後復興の日を迎えた北京図書館にとって、周

氏の寄贈書が善本の奠基石となったと称えているのも溢美の言ではない。52年寄贈に際し周氏は「書物を寄贈するのは娘を嫁にやるよりなもので、よいしゅうとめの家をさがさねばならない。北京図書館善本書部は趙万里先生が主任であり、かれは本場に書物がわかり書物を受取る方なので、書物もあそこへ行けば所を得たといえるし、私も安心だ。」と語り、蔵書中の精品をすべて715種を全て、手もとに1、2点も残すことなく捐獻したので、文化部の責任者鄭振鐸氏も「本場に奇特なことだ」と讃嘆したという。

趙万里氏の編目の計画は度重なる政治的圧迫等により実現をみず、やっと文革終了後、趙氏の高弟冀女士により周氏の90歳誕辰に間に合わせて81年完成され、やがて刊行の日を迎えたのである。

李盛鐸著 張玉範整理 《木犀軒藏書題記及書録》

(北京大学出版社, 1985年12月, 433頁, 8000部, 3.50元)

清末民国期の政界で活動した李盛鐸(1859-1934)の蔵書は、歿後1940年主要部分が北京大学の購収する所となり、1956年に至り向達氏の序を付し《北京大学図書館蔵李氏書目》が公刊され、計9087種、58385冊に及ぶ全容が広く知られている。この大部な蒐書中には善本が頗る多く、宋元版は300余種をかぞえ、明版や明清の精鈔、学者の稿本、校訂本の類も枚挙に遑ない。本書は北京大図書館の李氏旧蔵書に附された李盛鐸自身の題記計173篇を抄出し分類排列した〈木犀軒蔵書題記〉に北京図書館蔵袁克文旧蔵書に附された李盛鐸の題記13篇を附録とする前半(53頁)と、李盛鐸の草稿《木犀軒蔵書書録》(解放後科学院図書館が購入し1963年北京大図書館に転讓, 1464点著録, 20冊)を整理排印した後半(331頁)を併せ、書名索引(35頁)を付し、上記向達氏序文と本書の整

理編纂に当たった張玉範氏の〈李盛鐸及其蔵書〉の一文(文獻1980年3輯所収の増訂)及び黃濬《花隨人聖廬憶》に収める〈袁漱六蔵書散佚無存〉条を末尾に附録している。

李氏蔵書の整理には古くから北京図書館の趙万里氏が深く関与され、宿白・冀英・常芝英・趙西華諸氏の協力を得て上記分類目録を完成したのであったが、文革後張玉範氏らの努力により本書が編纂され、その真価がますます明らかとなり、利用にも大きな便宜が提供されることとなった訳である。

李氏蔵書の由来や特徴、ならびに善本中のめばしいもの等については、向・張両氏の文に詳らかであるから、ここにのべることは省く。唯李氏がはじめ上海に薬店を開いていた岸田吟香と交わり、後に来日して島田翰と相知り、日本に舶載され流伝した漢籍と和刻本の入手に力をいれた結果、千種を超える日本刊本や写本或いは一部朝鮮本がその蔵書中に含まれている点は留意に値する。

近時上海華東師範大学出版社の劉凌氏(同社文科編輯室副主任)が、同社の近刊3種を当東洋学文献センターに送って下さり、なおその簡単な紹介文を寄せられたので、以下その内容を和訳して読者の参考に供する。

周子美編 《嘉業堂鈔校本目録・天一閣蔵書經見録》

(1986年3月, 204頁, 2500部, 1.70元)

嘉業堂は今世紀初に建てられた中国最大の蔵書楼で、堂主劉承幹は古籍を熱愛蒐集し、嘉業堂全盛期の蔵書は60万巻20万冊に達した。劉承幹の蒐書は特に稿本・校本を重んじ、その収獲は中国の各大蔵書家に比べ冠絶しており、蒐書の質量ともに高く、中に少なからぬ珍貴な善本を含む。93歳の高齢に達した華東師大古籍研究所の周子美教授は、劉承幹と同郷(吳興)で代々親しかった関係から、曾て多年蔵書楼主任をつとめた。

本書は周教授の自ら録した鈔校本目録であり、毎条書名の下にその版本源流と歴代所蔵を記録しており、まことに嘉業堂蔵書善本目録として、重要な情報を提供する書目となるう。

次に本書の後半に収める天一閣は、中国前近代の今に留める最大規模かつ影響の最も大きい蔵書楼である。この天一閣蔵書は本世紀初に盗難にあい、大量の重要古籍が楼外に散佚した。羅振常先生は上海で書店を経営していた好条件を利用して、200余種に上る天一閣旧蔵古籍を手にし、夫々について皆提要进行し序跋や版種を紹介して後人がその大要を窺い得るようにしたが、これは天一閣蔵書の歴史を研究するに有力な参考となる。

この羅氏の遺稿をおいに当る周子美教授が整理して〈天一閣蔵書經見録〉3巻にまとめ、本書に収めて世に問うこととなったのである。

楊布生著《岳麓書院山長考》

(1986年8月, 248頁, 5000部, 2.30元)

中国の書院は唐代に始まり宋代に大いに栄えた。今もって現存する岳麓書院(湖南省長

沙)は宋代四大書院の一であり、大思想家の朱熹や張栻がみなここで学を講じ、学生は1千人に達し、清末に至るまで中国教育界に極めて大きな影響力を有していた。本書は歴代の50余名に及ぶ院長の経歴や、岳麓書院における教育活動と理論的貢献や学術的成果の各面にわたり、実事求是の探求と評価を加えたものである。

楊金鑾著 《朱熹与岳麓書院》

(1986年8月, 163頁, 5000部, 1.30元)

朱熹は岳麓書院の講学を通じ功績極めて大きく書院の最盛期を現出した。本書は、朱子を代表とする閩学派と、張栻を代表とする湖湘学派を対象に、書院を理学との関聯において研究を進め、朱子と岳麓書院について開拓者の学術著作となるものである。

岳麓書院を対象とするこの二著はともに資料が豊富実で、特に地方志・家刻本や家譜の類は珍重するに足り、書中に見える史実は詳細な考証の成果であって、中国特有の前近代書院教育史の研究にとり極めて大きな参考価値を有する。(東洋文化研究所教授)

「イスラム研究写本コレクション」紹介

鎌田 繁

東洋学文献センターは、現在、東洋文化研究所とともに「イスラム研究写本コレクション」の購入を進めている。西アジアに生れた宗教体系であるイスラームは、7世紀以来聖典クルアーンを中核に多種多様な学芸を産みだし、その成果はイスラームの流布とともに多くの文献となって各地に残されてきた。イスラーム研究の長い歴史をもつ欧米の研究機関には多くの良質の写本が将来されておき、それに基礎を置いた研究が行われている。しかし、写本などの文化遺産の移転が近年むづかしくなったこともあり、研究史の浅い我が国にはまとまったコレクションとしてはこれまで殆ど見るべきものがなかった。西アジア、イスラーム研究者の増加しつつある現状に鑑み、本コレクションの購入は非常に意味のあることと思われる。

このコレクションはオランダのハンス・ダイバー Hans Daiber 博士が1968年以來のイスラーム諸国の旅行のなかで収集したものであり、アラビア語を主とする、ペルシア語とトルコ語

のものを含む合計367点（総フォリオ数22000余）から成っている。ひとつの写本のなかにいくつもの文献が録されている場合もあるため、このなかには約700から800の様々なテキストが含まれている。これらの写本の大多数はシリアから、相当数がトルコ、イエメンから、そしてレバノン、イラク、パキスタン、インドからそれぞれ1点ずつもたらされている。

写本が書写された地域はモロッコからインドにまで及ぶが、その大多数は地中海東岸諸国で作成されており、これらの写本のうち130点は書写年月が記載されている。最も古いものは551 A H / 1156 C E になったもの（写本 No. 127）で、全体は12世紀から20世紀初頭に及ぶ期間に成立したものからなる。書写年月の記載のないものを含めて18世紀のものが最も多く169点を数え、以下19世紀87点、17世紀52点、20世紀初頭24点、15世紀23点、16世紀15点、14世紀3点、12及び13世紀各1点と続く。

著者や書名を同定できるテキストのうち、95点は新発見あるいは他の写本では知られていないものであり、著者自筆本も5点含まれる。以上の他に写本のあることは知られていたが、今まで校訂出版されていなかったテキストが172点ある。しかし既に校訂されたテキストの写本についても、その現行刊本の修正を要請するような知見を含んだものがある。

このコレクションの写本はイスラームの殆ど全ての学問分野に及んでいるが、収集者である旧蔵者自身がイスラーム思想の研究者であるために、イスラームの思想的側面に重点の置かれた集成となっている。そこに含まれているのは、クルアーン学、伝承（ハディース）、法学、教義学、神学、神秘主義（スーフィズム）、終末論、祈禱文、説教、倫理学、教育、哲学、心理学、論理学、医学、隠秘（オカルト）学、幾何学、天文学、韻律学、歴史、詩、語学（文法、意味論）、修辭学、弁論術に関するテキストである。

いくつかの具体的な例を引くと以下のようになる。イスラーム法学では、16世紀のエジプトの実際の法慣行を知るのに役立つ法学の運用と理論についてのテキスト（No. 39）、法学用語についての詳細な論考（Nos. 207, 220）がある。神秘主義の分野では、初期の著名な神秘家であるビスターミーやサリー・サカティーのこれまでに知られていない言葉を録している文献（No. 94）や、現行刊本の補正に役立つイブン・アター＝アッラー・ジャーズィリーの神秘論（No. 322）が見られる。14世紀の文法家イブン・ヒシャームの文法書とそれに加えられたビルマールウィーの注釈（No. 70）があり、その注釈は既知のものの中で最も古いものと考えられる。神学や教義学の分野ではアブー・ハニーフアのイスラーム教義綱要（Nos. 18, 19, 36）やそれについての未刊の浩瀚な注釈（No. 18）、シーア派の一分派であるザイド派の教義についての17世紀のザイド派の学者の手になる論文（No. 50）が見られる。

預言者ムハンマドの生誕を祝いその生涯を賛美する一連の宗教詩は現実の社会のなかで育てられている宗教感情を把握するのに役立つのであるが、そのなかで今迄知られていなかった12世紀の著作家による作品（No. 303）も見られる。クルアーン注釈書としては、印刷刊行されていない11世紀の学者アブー・ライス・サマルカンデイーの、残念ながら完結していない、注釈書（No. 356）がある。これは最古の注釈家たちに言及しており、初期のクルアーン注釈史の解明に貢献するものと思われる。哲学の分野では、イスラーム・スコラ哲学の大成者イブン・スィナーの小論文（No. 46）や15世紀のイブン・ジャマールの哲学用語についての論者（No. 276）などがある。ヒッポクラテスの医学についての格言集のアラビア語訳（No. 183）、また天文観測儀（アストロラーベ）についての論文（No. 20）がある。これまでに亡失したと

されていた9世紀の学者アキーキーの系譜学書の写本（No. 127）、18世紀のダマスクスで起きた地震の目撃者による証言記録（No. 123）、も見られる。

以上このコレクションに含まれるテキストの一部を紹介したが、このようにきわめて多様な文献を含んでおり、写本史料に直接触れる機会の少ない我が国の研究者に裨益すること大であらう。

〔なお、この文を草するに当たっては、旧蔵者自身の手になるコレクションの紹介、"An Arabic Manuscript Library. Some important discoveries", *Manuscripts of the Middle East* 2 (1987), 及び目録, *A Collection of Arabic Manuscripts including Some Turkish and Persian Manuscripts*, Amsterdam, 1986 を参照した。〕

（東洋文化研究所助教授）

中国における詞学研究の動向

1987年4月、華東師範大学劉凌教授より、本センターへ、同大学の刊行物が寄贈され、その際、同大学の詞学研究及び資料編纂活動の一端を日本国内に紹介してほしい旨の依頼があった。ここに、同教授から寄託された『詞学』についての紹介文を翻訳して掲載する。

× × × ×

詞学発展理論の研究学術専刊 —— 『詞学』

劉 凌
(大 木 康訳)

『詞学』は、詞学の研究促進を目的とした中国上海華東師範大学出版社刊行の全国的学術専刊である。編集には、詞学の著名学者唐圭璋、施蛰存、馬興榮があたりていて“一代の詞宗”といわれた夏承燾も、生前は主編者の一人であり、その編集委員会には、中国詞学界において、長年にわたり詞学の理論の研究を積み、最高の成果を達成した学者、専門家が集まっている。1981年の創刊以来、すでに5輯までが出版されており、学界及び文化人、知識人の間で、高い声望を博している。

『詞学』に掲載された論文は、理論を重んずる傾向が強い。例えば、第1輯に発表された唐圭璋、金啓華の「歴代詞学研究述略」と

馬興榮の「建国30年来の詞学研究」は、宋代以来現在に至るまでの詞学の研究状況について、体系的な総説を行ない、研究成果を概括したうえで、今後の研究の課題を設定し、そこに至る道筋を指示している。

『詞学』は、先人が手をつけなかった研究領域についても、組織的に論文を編集し、研究を推進している。従来のほとんどの詞学研究者は、宋詞の研究に集中しており、金、元、明、清の詞の研究するものは、わずかに数える程しかいなかった。本誌第1輯では、清詞の最後を飾る詞人王国維に関する二篇の文章を掲載し、第3輯では、清詞の三大流派——浙西派、常州派、陽羨派に関する六篇のもの

ばる研究論文を掲載している。また、第4輯には、金啓華の「金詞論綱」を掲載した。金代の詞は、南宋詞ほど盛んではなかったが、しかし、詞としては、北方にあっては依然として各時代ごとにすぐれた作者がいたのである。「論綱」の一文は、作品、詞風の観点から、金詞を三つの時期に分け、詳細、確実な論述をしている。

『詞学』に掲載された文章には、ほかに“点将録”“集句”などのような、中国古典文学の伝統的な著作形式を用いたものもある。たとえば、第3輯に発表された名詞家錢仲聯の「光宣詞壇点将録」は、清末光緒、宣統年間の詞壇を品評し、当時の詞派を比較検討したものである。第4輯には、上海師範大学教授黃蓀の「浣溪沙集宋人句」十二首を載せている。古人の句を集めて詩を作るのは、宋の王安石にはじまり、同じく詞を作るのは、清の朱彝尊にはじまる。これはもともと文字の遊戯ではあるが、優れたものになると、この形式を借りて自己の心情を発露する文学になり得ている。

『詞学』は、文献的価値を具えた資料を発表することにより力を注いでいる。第4輯には、清末の詞人陳慶森の「百尺樓詞」を収めている。

第22回全国文献センター長会議記事

昭和62年2月13日(金)に全国文献センター長会議が、神戸大学経済研究所経営分析文献センターで開催された。

文部省から原大学図書館係長が出席し、「昭和62年度予算は学術情報課の所管では、学術情報センターに増員・増額があり、11大学の電算化を実施し、図書館間のファックス導入経費を計上した。大学図書館の名称を情報化に即して変更しようとする動きがあるので、文献センターの名称も新しい名称にする時期が来ているように思われる」と説明があった。

各文献センターからは大要下記の報告があった。

○東京大学外国法文献センター

外国法に関する基礎資料を収集整備して利用に供している。3年計画で7セア7ン諸国、大洋

る。この詞集の稿本は、100年あまり人の目に触れることのなかったものであるが、本誌は、原本にもとづいて排印した。これにより、清詞に一人の作者の全作品集を加えたことになる。文廷式は清末の詞学復興の功労者であり、『雲起軒詞鈔』と『純常子枝語』の著作がある。『枝語』は分量が多いので、『詞学』の編者が、そのうち詞を論じた部分を輯録整理し、「純常子詞話」として、第5輯に掲載した。

『詞学』の編者は、日本との文化交流を非常に重視しており、第2輯には、上海師範大学古籍研究所張珍懷の「日本の詞学」を掲載した。唐の張志和が『漁歌子』五首を作ってから49年の後、平安朝の弘仁14年に日本に伝わり、当時の嵯峨天皇は賀茂神社の御宴の折に五首の『漁歌子』を作られた。張珍懷の論文は、19世紀末葉、日本の詞学黄金時代の名家、森槐南、高野竹隱、森川竹溪などの作品を研究し、高く評価している。また、1、2、5輯にはそれぞれ、日本の学者松浦友久の『越調詩』、西紀昭の蘇軾、村上哲見の柳永に関する諸論文を掲載している。

(筆者 華東師範大学教授)
(記者 東洋文化研究所助手)

洲諸国の資料が整備され、引続き中南米、中近東の資料収集を進める。本年度中に新しい建物が完成する。

○一橋大学日本経済統計文献センター

明治以降の日本経済統計に関する調査資料、研究資料の収集整備公開、データベースシステム開発を実施し、最近では社会経済の書誌情報データベースの編成に重点を置いている。

○神戸大学経営分析文献センター

近年高度情報化社会に即応した文献センターへの脱皮が強く認識され、ドキュメンテーションセンターを一段と発展させ、学術情報データベースの作成も行うようになった。設立当初からの目的として、明治以降の営業報告書等財務諸表関係の資料、社史、企業者伝記等経営史に関する文献の蓄積が続いている。

○京都大学東洋学文献センター

親研究所の資料を外部の利用者に提供するのがセンターの業務になっている。創設以来20年明人文集、地方史の収集を重点的に行ってきた。

○東京大学東洋学文献センター

センターの事業として、センター叢刊の刊行、研究所未収の漢籍で他機関の所蔵するものマイクログラフによる収集、国内各地に散在する未整理漢籍の調査と漢籍調査報告書の作成、漢籍整理促進事業の一環としての漢籍整理長期研修などを行ってきたが、今年度から朝鮮関係図書所在調査を実施、情報検索システムの一端としてパソコンを導入、東洋学関係図書・資料の書誌をデータベース化している。

情報検索システムの整備が共通議題として提案され、各文献センターから研究目的と関連した形で開発状況、諸問題点の説明があった。学術情報ネットワークが急速に発展する中で、各文献センターが個々に対応するのではなく、1つの方針を持って対応することが必要であり、相互に連絡をとりあって問題を考えることになった。

清末・民国年間刊行の新聞・雑誌リプリント類を購入して
閲覧に供しています その3 (87・3・31現在)

申 報 第256～第305冊：民国18年(1929)3月～22年(1933)6月

中外紀聞 光緒21年(1895)11月～12月

華商報 第1～第18冊：1941年4月～1949年10月

盛京時報 第1～第35冊：1906年10月～1916年12月

東洋学文献センター叢刊既刊一覧

(※はなくなりました)

* 第1輯 東洋文化研究所 新収図書目録 (昭和41年度)

* 第2輯 清代地方劇資料集 (一)

* 第3輯 清代地方劇資料集 (二)

- 第4輯 周揚著論文 目錄
第5輯 郁達夫資料
第6輯 東洋文化研究所 新収図書目録 (昭和42・43年度)
第7輯 朝鮮研究文獻目録 單行書篇 (上)
第8輯 朝鮮研究文獻目録 單行書篇 (中)
第9輯 朝鮮研究文獻目録 單行書篇 (下)
第10輯 李大釗文獻目録
第11輯 明刊元雜劇西廂記目録
第12輯 朝鮮研究文獻目録 單行書篇・編著者名索引
第13輯 魯迅全集注釈索引
第14輯 1930年代中国文芸雑誌 (一)
第15輯 朝鮮研究文獻目録 論文・記事篇 (I)
第16輯 朝鮮研究文獻目録 論文・記事篇 (II)
第17輯 朝鮮研究文獻目録 論文・記事篇 (III)
第18輯 郁達夫資料補篇 (上)
第19輯 切韻殘卷諸本補正
第20輯 目錄学
第21輯 花間集索引
第22輯 郁達夫資料補篇 (下)
第23輯 仁井田 博士 北京工商ギルド資料集 (一)
第24輯 江蘇区文学運動資料集
第25輯 仁井田 博士 北京工商ギルド資料集 (二)
第26輯 民国以来人名字別名索引
第27輯 自一九三七 日本現存 短期中国雑誌記事総目 (一)
第28輯 仁井田 博士 北京工商ギルド資料集 (三)
第29輯 中国左翼文芸理論における翻訳・引用文獻目録
第30輯 仁井田 博士 北京工商ギルド資料集 (四)
第31輯 儀禮疏攷正 (上)
第32輯 儀禮疏攷正 (下)
第33輯 仁井田 博士 北京工商ギルド資料集 (五)
第34輯 小説月報 (1920-1931) 総目録
第35輯 コミンテルン 中国関係論説・記事索引
第36輯 魯迅文言語集索引
第37輯 自一九三七 日本現存 短期中国雑誌記事総目 (二)
第38輯 自一九三七 日本現存 短期中国雑誌記事総目 (三)
第39輯 仁井田 博士 北京工商ギルド資料集 (六)
第40輯 東洋文化研究所蔵 中国土地文書目録・解説 (上)
第41輯 自一九三七 日本現存 短期中国雑誌記事総目 (四)
第42輯 校合本 大越史記全書 (上)
第43輯 『植民地雑誌』 (Kolonial Tijdschrift) 所収論文目録

- 第44輯 校合本 大越史記全書 (中)
第45輯 江西蘇区紅色戲劇資料集
第46輯 宋之間詩索引
第47輯 校合本 大越史記全書 (下)
* 第48輯 東洋文化研究所蔵 中国土地文書目録・解説 (下)
* 第49輯 研究所蔵 廣東宗族契據彙録 (上)
第50輯 沈佺期詩索引
第51輯 中華人民共和国・朝鮮民主主義人民共和国 職官歴任表
第52輯 韓国政治エリート研究資料 - 職位と略歴 -
* 別輯 1 東京大学東洋文化研究所漢籍分類目録 (書名・人名索引) 合併 四角号碼檢字表
別輯 2 京都大学人文科学研究所漢籍分類目録 (書名・人名通檢)
別輯 3 海外所在中国絵画目録 (東南アジア・ヨーロッパ編)
別輯 4 日本所在中国絵画目録 (寺院編)
別輯 5 LABRANG 李安宅の調査報告
別輯 6 日本所在中国絵画目録 (博物館編)
別輯 7 日本所在中国絵画目録 (個人蒐集編)
別輯 8 中国経済関係雑誌記事総目録 (一) - 『中外経済周刊』 『経済半月刊』
『工商半月刊』 -
別輯 9 孟郊詩索引 (上)
別輯10 孟郊詩索引 (下)
別輯11 中国経済関係雑誌記事総目録 (二) - 『国際貿易導報』 -
別輯12 中国経済関係雑誌記事総目録 (三) - 『中行月刊』 -
別輯13 『内務行政雑誌』 所収論文・記事目録 (A Catalogue of the Articles in Tijdschrift voor het Binnenlandsch Bestuur)

近 刊 案 内

- 第53輯 自一九三七 日本現存 短期中国雑誌記事総目 (五)
第54輯 研究所蔵 廣東宗族契據彙録 (下)
第55輯 南岳思大禪師立誓願文索引-六朝思想史資料- (仮題)
別輯14 中国経済関係雑誌記事総目録 (四) - 『銀行周報』 (上) -
別輯15 春秋晋国《侯馬盟書》字体通覧-山西省出土文字史料-

東洋学文献センターの利用案内

(1) 所 在
所在地 東京都文京区本郷7丁目3番1号
電 話 03-812-2111 (内線) 5839

(2) 利用手続

教職員の方は、身分証明書を提示して下さい。
学生の方は、在籍する大学の図書館長等の依頼状を持参の上、学生証を提示して下さい。
上記に該当しない方は、文献センター事務室に御相談下さい。
継続して閲覧を希望される時は閲覧票を発行します。当年度内有効です。
利用される際は、図書請求票に必要事項を記入し請求の上、所定の場所で御利用下さい。*

(3) 閲覧

平日 午前9時30分から午後4時30分まで。
土曜日 午前9時30分から12時まで。
日曜日、祝日、年末年始は閉室します。その他業務上の都合により閉室することがあります。
参考調査：所蔵文献資料の検索、利用方法及び関連する所在調査を可能な範囲内で行います。

(4) 文献複写

複写を希望される方は所定の手続をおとり下さい。
漢籍等電子複写機にかけられないものは写真複写になります。その場合別途手続をおとり下さい。

東洋学文献センター運営委員会(昭和62年度)

東洋文化研究所教授(委員長)	田仲 一成	東洋文化研究所 教授	池田 温
附属図書館長	山崎 弘郎	教授	板垣 雄三
法学部教授	渡辺 浩	教授	斯波 義信
文学部教授	溝口 雄三	教授	蜂屋 邦夫
農学部教授	今村奈良臣	教授	松丸 道雄
経済学部助教授	武田 晴人	助教授	猪口 孝
教養学部教授	丸山 松幸	助教授	加納 啓良
社会科学研究所教授	近藤 邦康	助教授	鎌田 繁
		助教授	濱下 武志
		助教授	宮脇 博史

東洋学文献センター教官

センター長	教授(併任)	山崎 利男
センター主任	教授(併任)	田仲 一成
助	教授(併任)	田仲 一成
	手	山之内正彦
		猪口 孝
		加納 啓良
		鎌田 繁
		濱下 武志

東洋学文献センター専門委員会委員

教授	田仲 一成(委員長)
助教授	宮脇 博史(委員長代理)
教授	蜂屋 邦夫
助教授	猪口 孝
助教授	加納 啓良
助教授	鎌田 繁
助教授	濱下 武志

「東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター報」センター通信 No.28 1987年9月10日
東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター発行 東京都文京区本郷7丁目3番1号
電話 03-812-2111(内線) 5839

'89. 2. 21

東京大学東洋文化研究所・東洋学文献センター報

The Documentation Center for Asian Studies
Institute of Oriental Culture
University of Tokyo

センター通信

No.29 1989. 2

米国図書館グループのアジア書誌オンライン・システム

斯波 義 信

米国では東洋学ことに東アジア学に関する文献の所蔵で著名な17の大学図書館・研究所と、議会図書館、フリア美術館が一体となって、R L G=研究図書館グループを組織し、その本拠をスタンフォード大学に置いている。目的は、R L I N=研究図書館情報ネットワークを通じて、東アジア資料の図書館処理、情報検索のシステムを効率的にオンライン化し、研究教育面で利用者の便益を推進するものである。

1979年、110万ドルの経費援助と議会図書館の支援を得て、中・日・朝=C J K 3ヶ国の漢字・カナ・ハングルをコンピュータ処理できる端末の開発、およびR L I N向けソフトの拡充が始った。1983年に出来たC J K端末は、最少14,000の漢字容量に加え、通常のキイ・ボードに比べ3倍以上のキイすなわち、123の漢字用、51の仮名用、33のハングル用の基礎記号を打てる133の文字キイその他46のキイがあり、一たん慣れればたとえば1分で40の漢字が打てる。

ソフト面では、すでにローマナイズされた1200万の書誌記録データベースに加えてC J K データを盛りこむために、L CのMARC=機械読取目録作業フォーマットをローマ字データ用とC J Kデータ用の二本立てにして統合した。スタンフォード大のメイソン・コンピュータには漢字33,000を収める辞書が備わり、利用者が使うことができるし、辞書になるいはL C担当の手で追加され、年次100字あまりが各端末の辞書に加えられる。1983年9月に発足したオンライン・システムは、今日40万のC J K記録を収め、グループ圏外にいたハーバード大、加州大バークレイ校も参加に傾いているし、ホンコン、ロンドン、オーストラリア、台湾、ヨーロッパ内数ヶ所の図書館も端末についての照会を行っている由である。この新しいデータベース化の作業の長所は書誌検索を容易かつ効率的に

したことであり、司書業務がR L Gメンバーの間で分担されうるためにコストが省かれ、学者や司書はどこに特定の資料があるかをつきとめやすい。ために蔵書を増やす仕事が合理的かつ適切に進められるのである。在米のデータベースは近く国際的に利用できるようになるらしいから、対応を考えておく必要があると思われる。(東洋学文献センター長)

『郁達夫資料総目録附年譜』について

鈴木正夫

文化大革命の終息以来、中国学術界の活況は目を見張るものがあるが、現代文学の研究ももとよりその例にもれない。各種目録類によって知る限りにおいても、研究成果の発表は実に膨大な数にのぼる。10年一昔というが、確かに10年程前には、こんな状況になろうとは、私などには夢想だにできなかつた。

私が関心をもつ郁達夫についていえば、中華人民共和国の成立後、1977年末までに中国国内で発表された郁達夫に関する論文、記事の数は、わずかに数件にすぎない。それが逝世40年目の1985年1年だけでも250件近くが活字になっている。この年の9月に彼の郷里富陽で開催された「郁達夫逝世40周年記念学術討論会」に、思いがけなく私も招待を受け参加したが、ここへは国内招待者だけでも69名が出席しており、研究者層の厚さに驚いた。さらにこの間『郁達夫文集』全12巻はじめ約20点の作品集の出版があり、王自立、陳子善両氏編集による2回にわたる『郁達夫研究資料』など関係資料の出版があつた。

広州の花城出版社と三聯書店香港分店の共同編集出版になる『郁達夫文集』も王自立、陳子善両氏が特約編集人になっていて、この内容は明らかに全集に匹敵するものであり、この出版時点(82年1月～85年4月)で収集された断簡零墨に至るまでが網

羅されている。作者の生前に出版された作品集に入っているものを編集し直すのは簡単だが、この文集はそのような安易に編まれたものでないことは、少し細部にわたって検討を加えれば直ちに判然とする。従来作品集に入っていないものが大量に収録された上に、各作品には、初出誌(紙)を明示し(生前の作品集には全く示されていない)、詩の場合には手跡をも参照して字句の異同の校勘も極めて厳密に行われている。草の根をわけてもという編集者の執念が感じられる文集である。このように完備しているにもかかわらず、全集と銘打たず文集

82年12月に出た『郁達夫研究資料』(全2巻。天津人民出版社刊)は、「生平資料」、「創作自述」、「研究論文選編」、「大事記」、「著訳目録」、「研究資料目録」の各部からなっている。いずれも郁達夫研究には貴重な資料ばかりであり、本国人の有利さはあるにしても、その編集の博搜、周到ぶりにも舌を巻いた。ところが85年8月には、同じ編集者による別の『郁達夫研究資料』(全2巻。花城出版社、三聯書店香港分店)が出版されたのであった。こちらの方は、各種研究論文と、「郁達夫簡譜」、「郁達夫資料目録索引」とから構成されている。研究論文は天津出版社版と重複した部分もあるが、3年足らずの間に同種のものを編集

出版するからには、もとより相当の抱負と自信があったと思われる。とりわけ、「資料目録索引」は、前書での誤りをただし、新たに収集した資料を大幅に増やしており、これまた編集者の意気込みがあらにこちに窺える。よほどの精力を集中的に注がなければ、短期間にこうした書物ができなければならない。中国の図書館で時には2人1組になった研究者が徹底的調査に没頭している姿をしばしば見かけるに比べ、それがたとえ人的資源が余っているためであるにしろ、文革後数年でそうした態勢が出現したことを喜ぶとともに、大いにうらやましくも思い、脅威も感じた次第である。

1989年10月、伊藤虎丸、稲葉昭二両氏の贋尾に付して私も編集に参加した『郁達夫資料』を本文献センター叢刊第5輯として世に出していただいた。これは幸い内外でかなりの反響を呼び、その後収集した資料を『補篇』と名づけ、第18輯(73年3月)、第22輯(74年7月)の2冊にまとめて出版する機会も与えられた。

これら3冊の資料集は、当然のことながら完璧を期して編集したものであり、香港、シンガポール、マレーシア、スマトラ等へも材料を求めて足をのばした。しかし何より当時は中国本土での資料閲覧が許されない事情にあったのが心残りであった。また一種の事後責任的意識もあり、その後も資料収集は続けており、「いつの日か集大成して、すっきりした一本に編み直して決定版を作りたい」(拙文『郁達夫資料』編纂のその後、「センター通信」No.11, 1975年3月)と考えていた。

ところが、上記、王、陳両氏の『資料』が出るに及んで、これを凌駕する資料集を外国人である我々が果して作りうるのかという疑いを抱き気落ちした時期もある。け

れども詳しくその内容を吟味してみると、この書物にも改善の余地がなくもない事情が次第にはっきりしてきてきた。それはほぼ次の3点である。

(1) 両氏の資料には、明らかに先行する我々の資料を利用したと思われる箇所があるのは当然だが、誤りがそのまま踏襲されているところも少なくない。つまりこの資料では他の資料を未確認のまま引用したところと、自ら確認したものとの区別がなされていない。これは目録類を作成する場合、明確に区別してはいい点である。

(2) 郁達夫は日本との係わりの深い作家であり、日本にも知人や根強い読者がいる。従って日本の出版物に載った彼に関する論文や記事類は、『補篇』(下)刊行後に発表されたもの、新たに見つけ出されたものあわせてかなりの量に達する。それらがほとんどとられていない。

(3) 中国大陸内の資料の網羅ぶりはただ敬服のほかはないが、香港はともかく、台湾、シンガポール、その他欧米等で発表された資料はやはり欠けているものが多い。

以上のような点を考慮して、我々が集めてきた資料は、なお十分に出版に値すると思われる。私はたまたま83年10月から翌年3月にかけて勤務先の大学から派遣され復旦大学で研修する機会があった。この半年間は復旦大学以外にも中国各地の研究機関をまわって、もっぱら王、陳両氏の書中の項目で我々が未見であるものをできる限り確認する一方、新たな資料の発掘につとめた。85年8月に両氏編集の新版が出た後も短期間ながら、中国、シンガポール等へ出張し、同様の作業を続けた。

こうして我々3人が集めてきた87年末までに発表された資料を今回、「郁達夫資料総目録附年譜」としてセンター叢刊に入れ

ていただくことになった。原稿は400字詰で900枚にも届きそうなので、2冊になる予定である。

上冊の目次は次の通りである。

I 参考文献その他関係資料目録

A 専著

- (1) 日本語の部
 - (2) 中国語の部
 - (3) その他の言語の部
- ## B 論文・記事
- (1) 日本語の部
 - (2) 中国語の部
 - (3) その他の言語の部

C 翻訳

- (1) 日本語の部
- (2) その他の言語の部

下冊は次のような内容になるはずである。

II 著作一覧

- A 生前出版の著作
- B 生前出版の海賊版
- C 没後出版の著作
- D 出版年代不明の著作

III 附：年譜

我々がかつて編集した「郁達夫資料」全3冊は、自画自賛になって気がひけるが、しばしば中国はじめ外国の文献に引かれてきた。1冊送ってほしいなどという依頼もよく受けた。王、陳両氏の驚異的資料集が本場中国から出たことによって、「郁達夫資料」の使命は終ったかに見えたが、上に述べたような事情で、日本という地の利を生かして、王、陳両氏の労作の欠を補う新しい資料集を作り上げたと自負している。思いがけない長い歳月を要したのは、様々

—— 東洋学文献センター叢刊 近刊案内 ——

第56輯 自一九二七年 日本現存 短期中国雑誌記事総目 (六)

第57輯 郁達夫資料総目録附年譜(上)

別輯16 中国経済関係雑誌記事総目録(五) — 「銀行週報」(下) —

の理由があるが、すべて時代遅れの手作業に頼ったせいもある。ともかくそれが一段落をつげはっとしている。

言うまでもなく、この編集作業も、日本の政治情勢の変化、すなわち日中国交回復、中国の対外開放政策などがもたらした影響を強く受けている。中国での調査や中国の研究者、研究機関の協力が可能になったことが大きく作用して、何とかこうした形にまとめたのである。数多くの協力者の中でも、華東師範大学の陳子善氏の力添え抜きには、この仕事は考えられない。陳氏はこの数年頻繁に文通を続けている。陳氏らの仕事に私も若干はお手伝いしたとはいえ、同じ仕事をしている、いわばライバルであることがわかっていながら、終始協力的姿勢を惜しもうとしなかった陳氏には感謝のこともない。いわばこの仕事は日中研究者の合作の産物である。

資料作りなどは、もともと労の多いわりに報いられることの少ない仕事である。だが、常にこの種のものの恩恵を受けている立場の者としては、他の研究者にいくらかでも貢献しうると信じて、今回の書に世に問いたい。「へたな論文なんか書くよりしっかりした目録や索引を作るほうがどれだけ世のため人のためになるかもしれない」(高島俊男等編「中国『新時期文学』の108人」中国文芸研究会、1986年10月刊に付された高島俊男氏の「お礼」)という人もいて大いに力づけられる。この資料を利用して「うまい論文」を書いて下さる人たちがあらわれることを期待してやまない。

(横浜国立大学助教授)

クウェイト法務局寄贈図書紹介

鎌田 繁

昨年3月末外務省を通じて東京大学にクウェイト法務局 (Idārat al-Fatwā wa al-Tashrī') より書籍の寄贈の申し入れがあり、本文献センターが窓口になって受け入れることになった。寄贈されたのは全てアラビア語で書かれたもので、クウェイト法務局発行のクウェイトの現行法令及びその解説にかかわる単行書及び定期刊行物である。これまであまり知られていなかった現代のイスラーム法の文献であり、外国法やアジア地域の研究者に役立つであろう。今回寄贈された書籍は都合27冊あり、今後も法務局発行の書籍は寄贈を受ける予定である。

寄贈を受けた書籍の標題とその日本語訳は以下のとおり。

- (1) Qānūn al-tijāra al-bahriya [海商法]
- (2) Qānūn al-murāfa'at al-madaniya wa al-tijāriya [民事商事訴訟法]
- (3) al-Qānūn al-madani [民法]
- (4) Qānūn al-ta'mināt al-ijtimā'iya al-kuwayti [クウェイト社会保障法]
- (5) Qānūn al-tijāra [商法]
- (6) al-Mudhakkira li'l-qānūn al-madani [民法解説覚書]
- (7) al-Wajiz fi qānūn al-'amal al-kuwayti [クウェイト労働法綱要]
- (8) Mūjaz nazarīyat al-'aqd wafqan li'l-qānūn al-madani al-kuwayti [クウェイト民法による契約理論の概要]
- (9)~(16) Majmū'at al-mabādi' allatī qarrarat-hā Idārat al-fatwā wa al-tashrī' [法務局裁定原則集成] 第1集 (従1960年9月15日至1970年9月14日)、第2集 (従1970年9月15日至1975年9月14日)、第3集 (従1975年10月1日至1977年9月末日)、第4集 (従1977年10月1日至1978年9月末日)、第5集 (従1978年10月1日至1979年9月末日)、第6集 (従1979年10月1日至1980年9月末日)、第7集 (従1980年10月1日至1981年9月末日)、第8集 (従1981年10月1日至1982年9月末日)
- (17)~(21) Majmū'at al-tashrī'at al-kuwaytiya [クウェイト立法集成] 第4集 (1981)、第6集 (1987)、第7集 (1987)、第8集 (1986)、第9集 (1987)
- (22)~(27) Majallat Idārat al-fatwā wa al-tashrī' [法務局報] 第1年第1号 (1981)、第2年第2号 (1982)、第3年第3号 (1983)、第4年第4号 (1984)、第5年第5号 (1985)、第6年第6号 (1986)

(東洋文化研究所助教授)

資料紹介

前号に引き続き、上海華東師範大学劉凌教授より本センターに寄贈された同大学出版物についての、同教授による紹介文を翻訳して掲載する。

劉 凌
(大木 康 訳)

I. 中国近代教育史料編纂の新成果

中国で最も詳細で完璧な近代教育史料集『中国近代学制史料』第一輯上、下冊と第二輯の上冊とが、華東師範大学出版社から出版された。85歳の高齢になる華東師範大学教育学研究所朱有獻教授が、主編の任に当たっている。本書は、豊富で系統的かつ確実な史料を用い、歴史発展の道筋に順って、近代教育発展の概要を再現した、中国近代教育史料編纂の新成果であり、舒新城先生の編んだ『中国近代教育史資料』の後を承けて、内容はより豊富で網羅的、規模もより大きい大型の中国教育史料集である。

これまでに編まれた教育史や史料は、教育思想の解明と、官側の文書、言論の搜集とに重点をおいてきた。また、教育の発展と政治、経済、文化の発展の間の関係（すなわち教育の発展の巨視的法則）を論評することに重点をおいていた。本書はさらに、教育過程そのものの発展の微視的な内法的法則を論評することをより重んじ、当時の学校教育の実際資料を発掘し論ずることに意を注いで巨視と微視との総合を求め、教育の発展を網羅的に論述しようとしている。たとえば、戊戌運動時期の学堂の創設や沿革、カリキュラム、学生募集、教材、試験問題、授業の大綱や学堂の管理などについて、豊富で詳しい資料が収められている。これまで常に軽視されて来た政治家李鴻章、左宗棠の教育活動や、実際の学校経営の経験を持つ多くの教育家、経元善、張煥綸、鍾天緯、葉澄衷、さらに外国人教師丁韋良、白爾敦などについて、可能な限りの資料を集め、空白をうずめている。その多くの資料が、新発見のものであり、非常に珍しく手に入れにくいものである。

本書は、筋道をきちんと立てて、中国近代教育の発展の全貌を論述している。たとえば、第一輯上冊に収めた“京師同文館”の資料は、内容によって分類し、時間によって順序を立て、京師同文館の前身、創立及びその沿革からはじまって、洋務派と守旧派の同文館問題をめぐる論争、歴代の総管と管理者の名簿、教師と学生の名簿、各学科のカリキュラムや時間割、毎年の各学科の本試験問題、及び学生の試験答案、宿題、教学と管理の具体的活動をあらわす学堂の布告や上奏文、当事者の回想録などからなり、取り扱っている問題は多く、範囲はきわめて広く、史料も至って豊富である。京師同文館は1862年に創立されたので、すでに百年あまりが経過しており、多くの資料は全国各地にばらばらにちらばっていて、その多くは先人の収集整理が及んでいないものであった。これら資料の発掘と搜集は、たしかに非常に困難で偉大な系統的作業である。

本書は四輯に分かれ、第一輯は清末の学制がしかれる前の学堂、第二輯は清末の学制、第三輯は民国初年の学制、第四輯は近代の教会学校を扱っている。第一輯の上下冊と第二

輯の上冊はすでに出版され、第二輯の下冊は、現在印刷中である。1990年までに全巻が出るそう予定。本書は、中国教育史及び近代の政治、思想、経済史研究に重要な参考価値を有し、近代の数学史、化学史、物理学史、天文学史や各地方志を著す上でも、価値のある資料を提供している。

II 華東師範大学近刊新著三種紹介

方正耀著『明清人情小説研究』（1986年12月、306頁、3500部、1.70元）

中国古代の小説創作において、明清人情小説は重要な流派の一つである。人情小説は、家庭の盛衰や個人の立身出世、恋人たちの悲歡離合の物語を描くことを通して、社会のありさまを反映している。

本書の作者は、明清人情小説という一流派の問題をめぐって、タテ・ヨコの両方向からテーマを設けて論述を加えている。人情小説の発生、発展、興隆と衰微の歴史過程の輪廓を描き出し、さらに、人情小説が一連の小説のスタイル・流派として独自に具えている特徴を分析している。本書には穩当な評論と独自の理解とが多く見られ、中国古代小説史の研究に、たいへん参考にする価値がある。

代秀 莊辛著『画廊漫步』（1987年3月、133頁、5000部、1.40元）

中国の絵画には数千年の輝かしい歴史があり、源は遠く流れは長く、花や錦のようにある。発展して現代に至り、名家がますます輩出し、流派もさまざまになった。国画には幅広い愛好者があるが、ほんとうに国画の原理を理解し、芸術的享受に到達することは、決して容易なことではない。本書の作者は、画家が絵を画く過程を読者の眼前に彷彿させ、内容深くわかりやすい言葉で鑑賞の要点を指摘し、読者を国画芸術の世界に導いてゆくのである。

本書は、上海中国画院の名誉院長唐雲、現院長程十髮をはじめ、著名な画家応野平、黄幻吾、申石伽、吳青霞、劉旦宅、張榮平、林曦明、銭行健、韓敏などの人とその作品を論評し、偉大な画家齊白石の篆刻芸術と竹刻大師徐孝穆の竹刻芸術を紹介しており、中国画の研究に、きわめて重要な参考価値を有している。

曾樂山著『中西文化と哲学争論史』（1987年8月、242頁、6000部、1.80元）

本書では、1840年のアヘン戦争から1949年の中華人民共和国成立までを中国史における近代と規定する。この中国近代にあってきわだった問題は、いかにして中国と西洋の文化と哲学の関係を認識し、取り扱うかの問題であった。この問題をめぐり、中国近代の哲学流派や政治党派は、百年もの長きにわたる論争を展開してきたのである。

本書は、中国近代に中西文化・哲学争論の起った原因、中西文化・哲学争論が中国近代の文化・哲学の発展に与えた影響、および中西文化・哲学争論史を研究することの現実的意義を論じ、論争のそれぞれの段階とその代表人物を詳細に論述しており、中国近代文化史、思想史、哲学史の発展の一縮図とみなすことができる。

（筆者 華東師範大学教授）
（訳者 広島大学文学部講師）

清末・民国年間刊行の新聞・雑誌リプリント類を購入して
閲覧に供しています その4 ('88・12・31現在)

申報 第306冊 - 第355冊 : 1933年7月 - 1937年12月

盛京時報 第36 - 第38 : 1917年1月 - 12月

第42 - 第44 : 1919年1月 - 12月

第48 - 第86 : 1921年1月 - 1933年8月

第88 - 第122 : 1933年11月 - 1940年3月

第124 : 1940年7月 - 9月

群衆(武漢版) 第1巻 - 第2巻 : 1937年12月 - 1938年10月

新華日報 第1冊 - 第3冊 : 1938年1月11日 - 1939年5月5日

広州民国日報 第1冊 - 第42冊 : 1923年8月 - 1929年12月

東洋学文献センター運営委員会(昭和63年度)

東洋文化研究所教授(委員長)	戸田 禎佑	東洋文化研究所教授	山崎 利男
附属図書館長	黒田 晴雄	教授	池田 温
法学部教授	渡辺 浩	教授	松丸 道雄
文学部教授	溝口 雄三	教授	田中 一成
農学部教授	今村奈良臣	教授	板垣 雄三
経済学部助教授	原 朗	教授	濱下 武志
教養学部教授	丸山 松幸	助教授	加納 啓良
社会科学研究所教授	近藤 邦康	助教授	宮脇 博史
		助教授	鎌田 繁
		助教授	関本 照夫

東洋学文献センター教官

センター長	教授(併任)	斯波 義信
センター主任	教授(併任)	戸田 禎佑
教授(併任)	戸田 禎佑	
助手	山之内正彦	

東洋学文献センター専門委員会委員

教授	戸田 禎佑(委員長)
教授	田中 一成
教授	濱下 武志
助教授	加納 啓良
助教授	宮脇 博史
助教授	鎌田 繁
助教授	関本 照夫

「東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター報」センター通信 No.29 1989年2月20日
東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター編集・発行 東京都文京区本郷7丁目3番1号

電話 03-812-2111(内線) 5839

90.3.22

東京大学東洋文化研究所・東洋学文献センター報

The Documentation Center for Asian Studies
Institute of Oriental Culture
University of Tokyo

センター通信

No.30 1990.3

アジア諸地域の新聞の収集

戸田 禎佑

中国、ソ連、東欧等、激動する世界状況のなかで、現代社会についての研究が特に要求される昨今、新聞が果す資料的役割の重要性は論をまたない。東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センターでは、従来より資料蒐集事業の一環として新聞資料の収集を心がけてきたが、それは主に中国の新聞の影印版を中心とするものであった。

近年、広くアジア全域の社会的動向趨勢を把握することが要請される事態に対応するため、本年度から、さらに積極的に新聞の受け入れを行うこととした。すなわち、基本方針としては、中国に加えて東南アジア、南アジア、西アジア各地域の新聞を全面的に収集していくが、当面、予算上中国以外は、一国一紙を基準に閲覧に備え、特に同時性を要求される新聞に関しては現物を、その他のものは半年ほどの時差はあるが、マイクロフィルムを購入するというものである。

新聞の収集については、保存管理上、多くの問題があるが、その最たるものは収納スペースである。従って現物で購入しても一定期間を過ぎれば、マイクロ化したうえで、廃棄することとも考えねばならないであろう。そのような事態を予測したうえで、なるべくマイクロフィルムですむものは、現物購入をひかえたわけである。さらに新聞の記事内容に関する情報検索ともなれば、その作業に大きな組織が必要となろう。これら将来の課題も見込みながら、当センターの重点的事業として、敢えて新聞資料の収集に踏み切ったのは、そこに大きなメリットがあると考えられるからである。

我々が外国に帯在中、よく経験することであるが、自国の新聞のあるところは、一種のたまり場となり、情報交換の場となる。当文献センターでも、多くの外国人留学生等が自国の、あるいはアジア諸地域の新聞を恒常的に閲覧するようになれば、そのことにより、

国際交流の環も更にひろがり、研究所自体もより活性化していくものと考える。このような状況は資料収集作業にとって副次的なことかも知れないが、これからの国際化社会では無視出来ない重要性を持つものである。

以下に現在、当センターが購入中の新聞名を列举するが、これらは、さらに充実していく予定であり、整理がつき次第、閲覧に備える。

〔現物購入〕

- China
法制日報
諷刺与幽默
福建僑報
光明日報
解放軍報
經濟日報
遼寧經濟報
人民日報
人民日報 (海外版)
華僑日報
New Age
People's Democracy
中国通信
朝鮮通信
労働新聞 (縮刷版)
東亜日報
中央日報
中央日報
- Hong Kong
○ India
○ Japan
○ Korea (North)
○ Korea (South)
○ Taiwan

〔マイクロフィルム購入〕

- Bangladesh
○ China
Bangladesh Observer
北京日報
福建日報
黒龍江日報
解放日報
南方日報
農民日報
Al-Ahram
大公報
星島日報
The Economic Times
Suara Pemanduan
- Egypt
○ Hong Kong
○ India
○ Indonesia
South China Morning Post

- 明報
The Times of India
東洋經濟日報

東洋經濟日報

中央日報

深圳特区報

四川日報

天津日報

浙江日報

中国郷鎮企業報

South China Morning Post

大公报

星島日報

The Economic Times

Star of Malaya

Suara Pemanduan

- Iran
○ Israel
○ Japan
○ Korea (South)
○ Lebanon
○ Malaysia
○ Pakistan
○ The Philippines
○ Singapore
○ Sri Lanka
○ Taiwan
○ Thailand
○ Turkey
○ Vietnam
- Keyhan
Jerusalem Post
統一日報
朝鮮日報
Al-Nahar
New Straits Times
The Muslim
Manila Chronicle
Straits Times
Daily News
經濟日報
Bangkok Post
Cumhuriyet
Nhan Dan

L' Orient-Le Jour

聯合報

(東洋学文献センター主任)

清末・民国年間刊行の新聞・雑誌リプリント類を購入して
閲覧に供しています その5 ('89・12・31現在)

群衆

- 重慶版 第2巻～第11巻：1938年12月～1946年3月
香港版 第1期～第143期：1947年1月～1949年10月
新華日報 第4冊～第18冊：1939年7月～1947年2月
新華日報索引 第1冊～第9冊：1938年1月～1947年2月
南方政府公報

第1輯 軍政府公報

第1号～第79号：1917年9月～1918年5月

修学 第1号～第213号：1918年8月～1920年9月

光学 第1号～第40号：1920年12月～1921年4月

第2輯 陸海軍大元帥大本營公報

1922年1月～1923年12月：第1号～第42号

1924年1月～1924年12月：第1号～第36号

1925年1月～1925年12月：第1号～第14号

第3輯 中華民國国民政府公報

1925年7月～1926年11月：第1号～第52号

東南アジア華人社会資料の蒐集について

田 仲 一 成

本年度、東南アジア各地（セラソゴル、ペナン、クアラルンプール、マラッカ、シンガポール等）の華人組織の資料、主として会館録59点をまとめて蒐集することができた。中国地域社会史・東南アジア華人史の研究にとつての基礎資料であり、これだけまとまった量の貴重な資料を手でできたことは近現代中国関係資料の蒐集を資料蒐集活動の柱の一つとしてきた本センターにとつて大きな成果であり、幸運といわなくてはならない。以下にそのリストを掲げると共に研究者の利用を歓迎する。

- 雪蘭莪福建会館章程 雪蘭莪福建会館 雪蘭莪福建会館 1974年 24p 20cm
- MEMORANDUM AND ARTICLES OF ASSOCIATION OF SINGAPORE HOKI-EN HUAY KUAN Sd. E. TONGUE SINGAPORE HOKIEN HUAY KUAN 1937年 22p 26cm
- 雪蘭莪南安会館三十五週年紀念特刊 暨南安歴代文献及邑賢創業史 雪蘭莪南安会館特刊工作委员会 雪蘭莪南安会館特刊工作委员会 1972年 478p 27cm
- 南安会館金禧紀念特刊 南安会館金禧紀念特刊編輯委員会 新加坡南安会館 1977年 463p 27cm
- 馬六甲同安金厦会館四十四週年暨大厦落成紀念特刊 馬六甲同安金厦会館四十四週年暨大厦落成紀念特刊編輯委員会 馬六甲同安金厦会館 1975年 426p 26cm
- 馬六甲同安金厦会館青年部主辦本地書画創作展覽會特刊 馬六甲同安金厦会館青年部主辦本地書画創作展覽會特刊小組 馬六甲同安金厦会館青年部 1979年 80p 21cm
- 広東会館聯合会 広聯合会年報小組委員会 広東会館聯合会 1968年 218p 26cm
- 雪蘭莪広東会館紀念特刊 雪蘭莪広東会館編輯委員会 雪蘭莪広東会館 1960年 192p 27cm
- 雪蘭莪広東会館章程 一九七三年十一月改正 雪蘭莪広東会館 雪蘭莪広東会館 1973年 33p 17cm
- 竜岡会訊（第三期、檳城古城会館成立一〇七週年会慶特輯） 竜岡会訊委員会 馬來西亜龍岡親義總會 1981年 92p 26cm
- 新加坡東安会館章程 新加坡東安会館 新加坡東安会館 1970年 24p 15cm
- 新加坡東安会館擴建会所委員会徵信錄 徵信錄編輯委員会 新加坡東安会館擴建会所委員会 1972年 20p 27cm
- 雪蘭莪惠州会館1961年度年報 雪蘭莪惠州会館年報編輯委員会 雪蘭莪惠州会館 1961年 48p 27cm
- 雪蘭莪惠州会館年報 1962 雪蘭莪惠州会館年報編輯委員会 雪蘭莪惠州会館 1963年 17p 22cm

- 雪蘭莪惠州会館年報 1963 雪蘭莪惠州会館年報編輯委員会 雪蘭莪惠州会館 1964年 20p 23cm
- 雪蘭莪惠州会館年報 1964 雪蘭莪惠州会館年報編輯委員会 雪蘭莪惠州会館 1965年 24p 23cm
- 雪蘭莪惠州会館年報 1965至66年 雪蘭莪惠州会館年報編輯委員会 雪蘭莪惠州会館 1967年 57p 23cm
- 雪蘭莪惠州会館年報 1967至68年 雪蘭莪惠州会館文書股 雪蘭莪惠州会館 1969年 59p 23cm
- 雪蘭莪惠州会館年報 1969・70 雪蘭莪惠州会館文書股 雪蘭莪惠州会館 1971年 61p 23cm
- 雪蘭莪惠州会館年報 1971・1972 雪蘭莪惠州会館文書股 雪蘭莪惠州会館 1973年 69p 23cm
- 雪蘭莪惠州会館年報 1973—1974 雪蘭莪惠州会館文書股 雪蘭莪惠州会館 1975年 39p 23cm
- 雪蘭莪惠州会館年報 1975—1976 雪蘭莪惠州会館年報編輯委員会 雪蘭莪惠州会館 1977年 57p 23cm
- 雪蘭莪惠州会館年報 1977—1978 雪蘭莪惠州会館年報編輯委員会 雪蘭莪惠州会館 1979年 60p 23cm
- 雪蘭莪惠州会館産業重建宣言 雪蘭莪惠州会館第一百一十一屆福利部執行委員婦女協理委員聯席會議 雪蘭莪惠州会館 1977年 10p 23cm
- 雪蘭莪惠州会館青年團主辦全國文芸歌曲及客家民間山歌比賽大會 雪蘭莪惠州会館全國文芸歌曲及客家民間山歌比賽大會特刊編輯委員会 雪蘭莪惠州会館 1978年 13p 27cm
- 雪蘭莪潮州八邑会館鑽禧紀念特刊 雪蘭莪潮州八邑会館鑽禧紀念特刊編輯委員会 雪蘭莪潮州八邑会館 1968年 318p 27cm
- 雪蘭莪潮州八邑会館八十四週年紀念特刊 雪蘭莪潮州八邑会館八十四週年紀念特刊編輯委員会 雪蘭莪潮州八邑会館 1977年 417p 26cm
- 馬來西亜吉隆坡河婆同鄉会一九七五・七六年会務彙報 馬來西亜吉隆坡河婆同鄉会總務処 馬來西亜吉隆坡河婆同鄉会 1976年 53p 27cm
- 馬來西亜全國河婆同鄉会聯合大会紀念特刊 馬來西亜全國河婆同鄉会 馬來西亜全國河婆同鄉会 1978年 80p 26cm
- 河婆同鄉会会訊 河婆之声 第一期河聯特輯 “河婆之声” 編輯委員会 河婆同鄉会 1978年 84p 26cm
- 河婆同鄉会会訊 河婆之声 第二期 “河婆之声” 編輯委員会 河婆同鄉会 1979年 66p 26cm
- 河婆同鄉会会訊 河婆之声 第四期新加坡河婆同鄉聯歡大会特輯 “河婆之声” 編輯委員会 河婆同鄉会 1979年 80p 26cm
- 河婆之夜 吉隆坡河婆同鄉会青年部暨婦女部聯合主辦 吉隆坡河婆同鄉会青年部暨婦人

- 部吉隆坡河婆同郷会 1979年 96p 26cm
第二届河聯大会 柔佛州河婆同郷大夏落成慶典紀念特刊——河婆之声 河聯秘書処“河婆之声”編輯委員会 河婆同郷会 1981年 328p 27cm
新加坡豐順会館新厦落成開幕暨百週年紀念双慶特刊 豐順会館双慶特刊編輯小組 新加坡豐順会館 1974年 420p 27cm
新馬豐順会館泰國工商業親善訪問團名冊 新馬豐順会館泰國工商業親善訪問團 新加坡豐順会館 1979年 32p 16cm
馬六甲明星慈善社銅樂隊慶祝金禧紀念特刊 馬六甲明星慈善社銅樂隊金禧紀念特刊編輯委員会 明星慈善社銅樂隊金禧紀念特刊出版委員会 1975年 134p 27cm
新加坡肇慶会館一百週年紀年特刊 新加坡肇慶会館一百週年紀念特刊出版委員会 新加坡肇慶会館 1978年 224p 27cm
肇慶会館太極拳班十週年紀年特刊暨畢業同學錄 肇慶会館太極拳班 肇慶会館太極拳班(新加坡) 1967年 118p 24cm
太極拳基本拳式 鄧夢痕 肇慶会館太極拳班 1966年 220p 21cm
太極拳講義 鄧夢痕 肇慶会館太極拳班 1967年 30p 25cm
新加坡広恵肇碧山亭万縁勝会特刊 広恵肇碧山亭万縁勝会特刊編輯委員会 広恵肇碧山亭万縁勝会特刊出版委員会 1976年 232p 27cm
新嘉坡瓊州天后宮瓊州会館大夏落成紀念特刊 新嘉坡瓊州天后宮瓊州会館大夏落成紀念特刊編輯委員会 新嘉坡瓊州天后宮瓊州会館 1965年 196p 27cm
檳城瓊州会館百週年紀念特刊 慶委会特刊股 檳城瓊州会館百週年紀念慶祝委員会 1966年 312p 27cm
馬來西亞新加坡瓊州会館聯合会四十週年紀念特刊 馬來西亞新加坡瓊州会館聯合会四十週年紀念特刊編輯委員会 馬來西亞新加坡瓊州会館聯合会 1973年 504p 27cm
新加坡広和会館双竜義山暨産業徵用概況 新加坡広和会館双竜義山暨産業徵用概況編輯委員会 新加坡広和会館 1969年 40p 27cm
馬來西亞嘉属会館聯合会銀禧紀念 馬來西亞嘉属会館聯合会銀禧紀念特刊編輯委員会 馬來西亞嘉属会館聯合会銀禧紀念特刊出版委員会 1976年 730p 27cm
雪蘭莪嘉属会館1979会員常年大会報告書 雪蘭莪嘉属会館 1979年 35p 26cm
世界客属第二次懇親大会実録 世界客属第二次懇親大会実録編輯委員会 世界客属第二次懇親大会実録編輯委員会 1974年 874p 27cm
檳榔嶼客属公会四十週年紀念刊 一九三九年至一九七九年 檳榔嶼客属公会四十週年紀念刊編輯委員会 檳榔嶼客属公会 1979年 928p 26cm
檳城広東暨汀州会館一百七十週年紀念特刊 檳城広東暨汀州会館一百七十週年紀念特刊編輯委員会 檳城広東暨汀州会館 1973年 154p 27cm
雪蘭莪広西会館金禧紀念特刊 雪蘭莪広西会館金禧紀念特刊編輯委員会 雪蘭莪広西会館理事會 1979年 336p 27cm
檳州華人大會堂章程 莊漢良 JMN.,JP 檳州華人大會堂 1977年 30p 21cm

- 檳州華人大會堂興建十層大厦籌募基金宣言, 簡述成立經過, 発刊詞 檳州華人大會堂執行委員会, 建築委員会 檳州華人大會堂 1978年 3p
檳州華人大會堂团体會員名單 打字印本 14p 34cm
檳州中華総商会鑽禧紀念特刊 檳州中華総商会鑽禧紀念特刊編輯委員会 檳州中華総商会 1978年 776p 27cm
雪蘭莪中華大會堂慶祝五十四週年紀念特刊 雪蘭莪中華大會堂五十四週年紀念特刊編輯委員会 雪蘭莪中華大會堂文教委員会 1977年 962p 26cm
中国学会三十週年紀念刊 許雲樵 新加坡中国学会 1979年 274p 27cm
(東洋文化研究所教授)

東京大学東洋文化研究所所蔵漢籍貴重書の

複本化事業について

濱 下 武 志

本センターにおいて、かねてより準備を進めてきた東洋文化研究所所蔵漢籍貴重書の複本化事業が、今年度より開始された。

東洋文化研究所所蔵の漢籍はおよそ30万冊に及び、その中には800年余の以前に遡る宋代の刊本、或いは下って明代の刊本などが含まれている。更に、朝鮮刊本、日本古活字印本、五山刊本等の貴重漢籍も多い。これらの貴重書をはじめとする漢籍を中心として、学内外のみならず、海外からの長期、短期利用者は年間およそ1万人の多くを数え、書籍の損耗が憂慮される場合もしばしばであった。そのため、広く利用の便宜を図りながら、同時に原本の保存をより確かなものにする方策として、貴重漢籍の複本作製が計画された次第である。

初年次において複本化されたものは以下のとおりであり、原本総数32点404冊が複本化され、製本後の冊数は144冊である。

- | | |
|---------------------------|------------------|
| 附釈音周礼注疏42卷 | 元刊明修本 |
| 礼經会元4卷 | 明刊本 |
| 儀礼注疏17卷 | 嘉靖5年盧陵陳鳳梧刊本 |
| 儀礼注疏17卷 | 嘉靖中遂昌應撰刊本 |
| 礼記釈文4卷 | 淳熙中撫州公使庫刊開禧咸淳間修本 |
| 礼記正義殘1卷存卷第63 | 紹熙中三山黃唐刊印本 |
| 礼書150卷 | 宋刊元修本 |
| 儀礼經伝通解23卷集伝集註14卷附経伝通解続29卷 | 嘉定中刊元明間通修本 |
| 文公家礼殘2卷存卷第3第4 | 宋刊本 |

- 監本附音春秋公羊注疏28巻 元刊明修本
史記残2巻存巻第2第3 慶元中建安黃善夫刊本
増修陸元集百家註資治通鑑詳節残6巻存巻第1至第6 宋刊元修本
滿洲世譜式様図不分巻 清鈔本
諸儒校正東漢詳節残1巻存巻第24 宋刊本
咸淳臨安志残2巻存巻第84第85 宋刊本
通典200巻 嘉靖18年西樵方獻夫刊本
竹嶼山房雜部残8巻存巻第15至第22 清内府鈔本
新編古今事文類聚外集15巻 泰定二年廬陵武溪書院刊本
重校添註音辯唐柳先生文集残1巻存巻第9 宋刊本
周易9巻附略例1巻 慶長中古活字印本
尚書13巻 元和中古活字印本
毛詩20巻 慶長中古活字印本 (叡山版)
礼記20巻 慶長元和間古活字印本
春秋經伝集解30巻 慶長中古活字印本
論語10巻 天文2年泉南阿佐井野氏刊本
論語10巻 慶長中古活字印本 欠巻第2
孟子14巻 慶長中用元和古活字印本景刊
七經孟子考文補遺199巻 日本原刊黄紙印本
史記130巻 慶長元和間古活字印本
標題句解孔子家語3巻 慶長4年古活字印本
鶴林玉露18巻 慶長元和間古活字印本
群書治要50巻 元和2年銅活字印本 (駿河版)

複本の仕様は、原本をマイクロフィルムに写真撮影の後印画紙に焼付けをしたA5版サイズであり、規格は原書の版型に係わりなく同一サイズとした。これは書庫における配架の便を配慮したためでもある。

このようにして、初年次の複製は上記一覽のように、宋、元刊本および日本古活字印本が含まれ、内容では経書と史書とが多く見られる。次年度から基本的にはこの傾向が続くと思われるが、今後の複製本の内容は、本研究所の所蔵書籍の特徴を反映して、刊本の古いものやいわゆる稀観本の類から、むしろ大木庫や仁井田文庫に見られる、法律、政治、経済、社会に関する漢籍や、多くの宗教や文学関係の書籍に及んでいくことになる。

(東洋文化研究所教授)

朝鮮関係図書所在調査について

宮 島 博 史

本センターではかつて、『東洋学文献センター叢刊』の第7～9, 12, 15～17輯として、『朝鮮研究文献目録』単行書篇上・中・下、同編著者名索引、論文記事篇(Ⅰ)～(Ⅳ)を刊行した。これは末松保和氏が旧京城帝国大学在職中に作成された、1876年から1945年の間に出版された朝鮮関係の日本語図書・論文・記事を対象とする文献カードに基づくものであった。このシリーズは、近代朝鮮を研究する者にとってまことに利用価値が高く、日本国内だけでなく、外国の研究者にも重宝されて今日に至っている。

ただ惜しむらくは網羅的な文献目録であって、所蔵機関が記載されていないために、利用者は本書で文献名を確認してから、あちこちの図書館を駆けずり回らなければならない。それでもどこかの図書館に所蔵されていればまだしも、現存が確認できない文献も多いのである。また本書の刊行後、時折所外の方から本書に載せられている文献についての問い合わせがあるが、所蔵機関についてはきわめて不十分な対応しかできない。末松氏のカードは元来、旧京城帝大図書館や朝鮮総督府図書館に所蔵されていた文献に基づいて作成されたと思われるが、両図書館の蔵書を引き継いでいるソウル大学校図書館や韓国国立中央図書館にも、本書収録文献の一部しか所蔵されていないのが現状である。

このような状況に鑑みて、本センターでは1986年度から、本書収録文献の日本国内所在調査に着手した。本センター事務官渋谷義治氏と東京都立大学大学院生月脚達彦氏の協力を得て、現在までに次のような作業を行った。

- ① 本書掲載文献約7,000点のカード化。
- ② 同カードの書名50音順配列、書名アルファベット順配列、編著者名50音順配列、分類順配列。
- ③ 国内諸機関から刊行されている朝鮮関係蔵書目録の蒐集およびそのカード化。
- ④ 韓国国立中央図書館蔵書目録、大阪府立図書館蔵書目録からの近代朝鮮関係日本語図書のピックアップとそのカード化。
- ⑤ ③、④のカードによる本書未掲載の文献の補充。
- ⑥ 京都大学、天理大学、北海道大学等、近代朝鮮関係文献を多数所蔵する機関の目録整理状況の調査。

以上のような作業はなお予備的調査の段階に属するものであるが、本書にはかなり多くの脱落があること、書名・著者名等不正確なものも含まれていること、等が明らかになった。本年度中に予備的調査を終え、来年度以降本調査に入りたいと思っている。調査の結果はいずれセンター叢刊として順次刊行していく予定である。

(東洋文化研究所助教授)

センター 叢刊案内

- 第55輯 南嶽思大禪師立誓願文索引-六朝隋唐宗教・思想資料-
自一九三七年至一九三七年 短期中国雑誌記事総目 (六)
第56輯 郁達夫資料総目録附年譜 (上)
自一九三七年至一九三七年 短期中国雑誌記事総目 (七)
第57輯 郁達夫資料総目録附年譜 (下)
自一九三七年至一九三七年 短期中国雑誌記事総目 (七)
第58輯 山西票号資料・書簡篇
自一九三七年至一九三七年 短期中国雑誌記事総目 (七)
第59輯 中国經濟関係雑誌記事総目録 (四) - 『銀行週報』(上) -
自一九三七年至一九三七年 短期中国雑誌記事総目 (七)
第60輯 春秋晉國『侯馬盟書』字體通覽-山西省出土文字資料-
自一九三七年至一九三七年 短期中国雑誌記事総目 (七)
別輯14 中国經濟関係雑誌記事総目録 (五) - 『銀行週報』(下) -
自一九三七年至一九三七年 短期中国雑誌記事総目 (七)

東洋学文献センター運営委員会(平成元年度)

東洋文化研究所教授(委員長)	戸田 禎佑	東洋文化研究所教授	池田 温
附属図書館長	黒田 晴雄	教授	板垣 雄三
法学部教授	渡辺 浩	教授	後藤 明
文学部教授	戸川 芳郎	教授	田仲 一成
農学部教授	今村奈良臣	教授	濱下 武志
経済学部教授	原 朗	教授	松丸 道雄
教養学部教授	丸山 松幸	教授	柳澤 悠
社会科学研究所教授	近藤 邦康	助教授	加納 啓良
		助教授	関本 照夫
		助教授	宮脇 博史

東洋学文献センター教官

センター長	教授(併任)	斯波 義信	教授	戸田 禎佑	(委員長)
センター主任	教授(併任)	戸田 禎佑	教授	田仲 一成	
教授(併任)	戸田 禎佑	教授	濱下 武志		
助手	山之内正彦	助教授	加納 啓良		
		助教授	鈴木 董		
		助教授	関本 照夫		
		助教授	羽田 正		
		助教授	宮脇 博史		

東洋学文献センター専門委員会

教授	戸田 禎佑	(委員長)
教授	田仲 一成	
教授	濱下 武志	
助教授	加納 啓良	
助教授	鈴木 董	
助教授	関本 照夫	
助教授	羽田 正	
助教授	宮脇 博史	

「東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター報」センター通信 No.30 1990年3月5日
東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター編集・発行 東京都文京区本郷7丁目3番1号
電話 03-812-2111 (内線) 5839

センター通信

No.31 1991.3

岩波文庫 東洋学文献センター報



東洋学文献センターの25年

池田 温

本センターは1966年(昭和41)4月に発足したので、今年で満25年を迎える。この機会に1/4世紀におよぶセンターの歩みをふり返ってみることも、無益ではないであろう。まずセンターを支えた人の面から見てゆくと、センター長は東洋文化研究所長が兼ねることとなり、センターは研究所と一心同体には結ばれた関係にある。初代の川野重任・センター長以下、小口偉一・泉靖一・鈴木敬・荒松雄・窪徳忠・佐伯有一・大野盛雄・深井晋司・中根千枝・尾上兼英・山崎利男・斯波義信と既に十三代を経、現在筆者が引きついでいる。大野センター長が在任4年と特に長く、泉氏が半年余、荒・窪両氏が1年であったのを除けば、おおむね2年間勤められてきた。実質的にセンターを統括するセンター主任は、センターの顔というべき存在であり、初代小口主任をはじめ、窪・鈴木・尾上・佐伯・池田・関・松丸・田仲・戸田諸教授が相ついでその任にあった。2年間に在任が普通ながら、窪主任は5年、鈴木・尾上両主任は各4年在任し、センターの基礎を固め発展を図るのに尽力される所が多かった。センターの基本方針や業務計画等を議する運営委員には、学内の総合図書館をはじめ、法・経・文・教養・農等諸学部や社研等附置研究所の諸先生に加わっていただき、センターの針路を定めるについて諸般の助言と指導を仰いでいるのである。

センター主任を助けて実務を執行するメンバーは、はじめ併任教官がこれに当たったが、近年はセンター専門委員の数名が協力して事を進める体制が整っている。以上のメンバーと並んでセンターの中核を担っているのが専任スタッフと事務官諸氏である。センター専任教官は、初見昇(67年3月~83年3月)・陳明新(のち和泉新)(66年12月~82年4月)・沢谷昭次(67年4月~81年3月)3講師(陳・沢谷両氏は始め助手)と山之内正彦助手